新陰流を哲学する——江戸柳生の心法と刀法（一）

赤羽根　龍　夫

一

私は先祖が江戸の御家人で剣術の師範であったこともあり、少年の頃から剣術に興味をもっていた。御前試合で勝った相手から闇討ちに遭い、背後から斬り付けられて刀を抜くことが出来ずに倒されたので、武士道不覚悟ということでお家断絶になるところ、駆けつけた友人が刀を抜いておいてくれたのでお家断絶はまぬがれたという話などが言い伝えられている。

この時の刀——三代康継は、高校生の時、宮本武蔵の『五輪書』を読んで現代剣道が剣の理法に合わないことを知り、剣道部や道場通いを止め、真剣を使っての独り稽古に使ったので、今はだいぶ磨り減ってしまっている。

大学に入り上京し、滝野川に「今武蔵」と言われた鹿島神流の国井善弥師範の道場があることを知った。他の古流武術と違って、求められればどんな武術とも他流試合に応じ不敗であった国井に、もう少し自信がついたら入門しようとしたが、一九六六年に亡くなられてしまった。

大学を出て哲学を教えるようになったが、身体論に興味をもち、真剣での独り稽古の他、野口整体や気功法などの東洋体育的な稽古を始めた。また子供が小学生になり剣道の道場に通わせるのを機会に剣道や居合も再開した。

学際的な研究として日本思想史をテーマとしたが、江戸思想を調べていくと、徳川家の兵法指南であった柳生宗矩（むねのり）の事績や思想が分からなければ江戸時代の成り立ちは理解できないのではないかという思いを強くした。

幕藩体制を確立した三代将軍・家光は常々「我、天下統御の道、宗矩に学びてこその大体を得つれ」と言い、柳沢吉保は「神（新）陰流の道理をもって天下を治めよ」という家康の言葉を伝えている。そこで新陰流の道理とは何かを知るために、柳生新陰流、それも将軍家のお家流である江戸柳生を学ぶことを思い立った。

朝日カルチャーセンターで合気柔術を教えている鶴山晃瑞師範が上級者には柳生新陰流も教えていることを知り、合気柔術の講座に入門した。先生は私が武道史、特に柳生宗矩を研究していることを知ると、講座の後、教室の指導員をされている稲益氏と共に、初心者であるにもかかわらず個人的に柳生新陰流を教えてくださるようになった。

先生は、柳生新陰流の技（刀法）は稲益氏が、理論（心法）は私が中心に研究して欲しいと常々話された。二年ほどで大東流柔術秘伝目録の初伝を受け、新陰流は「三学円（さんがくえん）の太刀」と「九箇（くか）の太刀」の教えを受けたが、先生は昭和六十三年、それまで指導してきた「柳生新陰流研究会」の他に「江戸柳生刀法保存会」を発足させ、いよいよ江戸柳生の普及活動を始めよ

うとしていた矢先、昭和六十三年十二月、六十歳で急逝されてしまった。

その後、私は一九九八年に『徳川将軍と柳生新陰流』（南窓社）を上梓した。そこで江戸時代を通じて徳川将軍家の兵法師範であった江戸柳生家と代々の将軍との関係を論じた。しかしこの時は新陰流の刀法の研究および明治以降の江戸柳生については触れることが出来なかった。さらに二〇〇三年、『宮本武蔵を哲学する――柳生の剣・武蔵の剣』（南窓社）で、宮本武蔵の剣の本質と思想を柳生宗矩と比較して論じた。

現在、私は稲益氏について氏が大東流や新陰流などの伝統武術の術理をもとに独自に創流された合気躰術（たいじゅつ）の教えを受けながら、個人的に柳生新陰流の稽古も続けていただき、同時に江戸柳生の刀法や心法について共同で研究している。

お二人が学ばれた柳生新陰流の師範は、柳生の里の正木坂剣禅道場師範であり、教育大学の武道学講座の講師も勤められた大坪指方師範である。

大坪先生は明治三十九年に生まれ小学生の頃より尾張柳生十三代宗家の柳生厳周に学び、第十四代・柳生厳長とは兄弟弟子であり、厳長より印可（いんか）を受けている。

大坪先生はまた柳生新陰流師範・下条小三郎より江戸柳生の「目録」を受けている。下条小三郎は心形刀流（しんぎょうとうりゅう）の免許を若くして受け、当時新宿の若松町にあった柳生道場に他流試合に乗り込み、柳生厳周に敗れるや即、入門し、後に柳生厳周より「目録」を伝授され高弟となった。下条小三郎は海軍兵学校の教官も勤めた海軍中佐で『新版・柳生の里』（柳生観光協会、二〇〇〇年）に「下条氏は明治年間の印可受得者中最高の地位の人」とある。大正十一年五月、柳生厳周は柳生厳長に尾張柳生宗家を相伝継承し、退隠した。これに際して下条小三郎は柳生厳長の後見役を自負したが柳生厳長と意見が合わず、不和となり絶縁した。

大坪先生はこの時、下条小三郎に従った。下条小三郎は昭和六年、新宿十二社池畔に五十畳の櫟山館（れきさんかん）道場を建て指導にあたった。大坪先生は昭和七年に櫟山館道場の師範となっている。『図解コーチ合気道』（鶴山晃瑞著、昭和六十年、成美堂）に寄せた序文の中で次のように話されている。

師（下条小三郎柳生新陰印可）が、われわれのために庭内に建てて下さった櫟山館道場へ、竹下勇、浅野正恭などの、下条師海軍当時の級友達が通って来て、新陰を学ぶかたわら、大東流をはじめたものである。武田惣角先生が来られたのも、この頃であろう。そのうち、若松町植芝道場も出来、下条師のおともで、筆者も植芝道場へ通い、・・・

櫟山館道場は昭和二十年に空襲で爆撃を受けて焼失している。

大坪先生は、植芝盛平が若松町の合気道道場で下条小三郎に新陰流を学んだ時には、助手として打太刀を勤めた。下条小三郎は尾張柳生だけでなく江戸柳生の免許も受けている。尾張柳生は初代・兵庫助以来、剣術中心となったので、下条小三郎は体術を重視した江戸柳生系の新陰流を植芝に教えたのではないか。これは今後の研究課題である。

ここで植芝盛平が学んだ武術についてみてみよう。

植芝は盛平は十九歳で天神真揚流柔術や神影流の道場に入門しているが、この時学んだ神陰流がどの系統のものであるか不明である。その後、後藤派柳生流柔術の中井正勝の門に入り、明治四十一年、二十五歳で免許皆伝を受けた。後藤派柳生流柔術は、柳生宗矩の門人・竹永隼人を祖とする柳生心眼流の流れをくんでいる。盛平はまた武田惣角に大東流を学び、大正五年、三十三歳で目録相伝を受ける。大東流は会津藩の上級武士の間に伝えられた御殿武術であり、元家老の西郷頼母が武田惣角に伝えたものである。大東流の起源にも新陰流があることが次第に明らかになりつつある。武田惣角自身は、若い頃より小野派一刀流の達人として名をあげているが、新陰流も極めており、大正十一年に江戸柳生系の新陰流を植芝盛平に相伝している。

合気道二代目道主・植芝吉祥丸は『日本武道体系』第六巻の「合気術」編に「武田惣角、植芝盛平はともに『合気』を称する以前において、それぞれ『柳生新陰流』を含む諸流諸派を練磨し習得した人物である」とした上で、「大正十一年九月」の日付がある植芝盛平宛『新陰流伝書』（部分）の写真を載せている。

その伝書の頭書には「進履橋　新陰流兵法之書」と書かれており、自身に到る伝承系列を「上泉武蔵守藤原秀綱」「柳生但馬守平宗厳」「柳生但馬守平宗矩」「旧会津藩　武田惣角源正義」としている。「進履橋」とは宗矩の『兵法家伝書』冒頭の、新陰流のもっとも基本をなす太刀目録であるので、惣角の新陰流は江戸柳生であることは明らかである。

こうして見ると、武田惣角の大東流合気柔術や植芝盛平の合気道の源流には柳生新陰流、特に江戸柳生があることがよく分かる。

なお植芝盛平の合気道の発展の陰には竹下勇海軍大将や、竹下大将よりも早く植芝盛平に入門し、竹下大将を植芝盛平に紹介した浅野正恭海軍中将の存在がある。下条小三郎は、この二人とは海軍兵学校の同期生である。このような関係で下条小三郎も植芝盛平に新陰流を教えている。昭和十年の第一回日本古武道振興会演武大会の記録では、浅野中将は下条と共に柳生流を、竹下大将は大東流を演武している。

そうすると下条小三郎が江戸柳生を誰から学んだかが問題となる。というのは、尾張柳生系の師範たちによって、江戸柳生の技は幕末あるいは明治二十年頃には絶えてしまったと喧伝（けんでん）されているからである。

ここで明治以降の新陰流の歴史についてみてみよう。

明治十五年　明治天皇、宮内省に済寧館（さいねいかん）を創設

大正二年　明治天皇より柳生新陰流に永久保存の命があり、尾張柳生十三代厳周（六十八歳）、宮内省の済寧館の世話掛となる。

台湾銀行の総裁・柳生房義、牛込の自宅の庭に大道場・碧榕（へきよう）館（かん）を建立。この頃より大坪指方（八歳）、東京碧榕館に入門、厳周に指導を受ける。

大正九年　大坪指方（十五歳）、尾張柳生家の入門帖に署名

大正十年　済寧館、廃絶

大正十一年　柳生基夫・芳徳寺再建、厳周・厳長、新陰流演武

厳長（三十一歳）、尾張柳生の道統を継ぐ。厳周七十七歳

昭和三年　厳長、金剛館を尾州徳川侯爵家や柳生基夫出資により設立

昭和四年　厳長、近衛師団の師範となる。
昭和五年　厳長、金剛館を引き払い名古屋に帰る。
昭和六年　柳生新陰印可・下条小三郎、新宿十二社池畔に榛山館設立
昭和七年　厳周（八十八歳）没
　大坪指方（二十七歳）、下条小三郎建立の榛山館師範となる。
昭和二六年　大坪指方（四十六歳）、尾張柳生の控宗家（ひかえそうけ）として厳長より師範印可を受ける。
昭和三十年　東京柳生会発足。
昭和三二年　厳長『正伝新陰流』
昭和四十年　大坪指方、柳生芳徳寺の橋本老師と共に正木坂剣禅道場を創建し師範となる。
昭和四一年　延春（四十七歳）、第十五代尾張柳生宗家を継ぐ。
昭和四二年　厳長没、七十八歳
昭和四六年　大坪指方、東京教育大学・武道学科の古武道講座講師となる。

こうしてみると明治以来の新陰流の歴史の表舞台には確かに江戸柳生の姿は見られない。江戸柳生の宗家が家業であった新陰流に関心を示さなかったのに対し、尾張柳生の宗家は積極的に新陰流の道統を守ろうとする熱意が見られた。私自身もこのことに対して尾張柳生の伝統に大きな敬意を払うものである。さらには江戸柳生の菩提寺である柳生の里の芳徳寺を再建したのも尾張柳生である。しかしそれをもって江戸柳生の技が絶えたということは事実に反している。

杉田定一『柳生六百年史』には柳生藩の家老を務めた小山田三郎助の「小山田日記」から明治三年の柳生俊益（二十歳）の新陰流の稽古について「この頃毎月の行事左のごとし」として次の記事を引用している。

三ノ日　御家流奥儀稽古
二七ノ日　二時より五時まで御家流稽古
四九ノ日　二時より五時まで御家流稽古

すくなくとも明治四年の廃藩置県で柳生藩が消滅するまでは柳生俊益は柳生の里で家流の新陰流を稽古していたと思われる。俊益は明治五年に東京に移り、後に子爵を授けられ、また名前を俊郎に改めている。

柳生の里ではその後も稽古は続けられた。

『村史柳生の里』に次のようにある。

維新後も明治十五年（一八八二）頃まで柳生に居残っていた旧藩主、中村二角について来り学ぶもの多く、いま芳徳寺に残存する起請文について、その地名を拾って見ると、南都、帯解、和束、高尾、坂原須川、白石、高樋、神殿、嘉幡、荒蒔、六条、庵治、安堵、郡山、桧垣、遠田など、また遠く播磨国や明石あたりにも及んでいる。相当多勢の人達が柳生に来て、練磨の功を積んだものと思われる。しかし中村二角の奈良転住によって、姿を消してしまった。

その後も柳生の里では新陰流の稽古は続けられた。杉田定一の随筆『明治の柳生武士』には次のようにある。

私の祖父は、養子ではあったが、身長五尺八寸、覇気あり、胆力あり、維新のさいの長州征伐や天誅組騒動に従軍したのが自慢という、きっすいの柳生武士であった。

二人の男子があり、長男を亀次郎、二男を貫二という。祖父の影響を受けて、二人とも軍を志願し、兄の亀次郎は日清戦争に従軍して、陸軍一等軍曹。弟の貫二は日露戦争に従軍した海軍二等機関兵、軍艦

高砂に乗り組み、旅順港沖で戦死した。（中略）

叔父の貫二は、小藩ながら、柳生流で名高い柳生のさとに生まれたので、かつたつな、伸び伸びした気象で、仲々の好男子であった。（中略）

そのころの日本は、若さと活気にあふれ、勢いに満ちていた半面、まだ徳川時代の名残が各所に残っており、柳生などでは旧藩士の中村二角や杉岡政房などが、柳生新陰流道場を開いて、全国から集まる青少年を指導していたし、精神面では旧藩の儒者、岡村達が盛んに儒教の教えを説き、（中略）青年たちの心の支柱となっていた。

柳生では、明治元年に藩主の後継者をめぐるお家騒動があったりして、有能有為の人材が、多く斃れたため、旧藩の伝統を継ぐ、これらの人たちが、いわゆる人材づくりに、余生をかけたのであろう。

貫二叔父は、こうした尚武の気風盛んな柳生のさとで成人した。岡村達に漢学を学び、中村二角に柳生新陰流の教えを乞うた。（中略）

中村二角は、慶応三年（一八六七）十二月、藩主俊益が急遽、帰国した際に俊益に従って柳生の里に戻っており、幕末の柳生藩で銃隊の世話役を務めている。杉田貫二は明治三十七年、日露戦争で二十三歳で戦死しているので明治十四年頃の生まれであり、中村二角が柳生の里から奈良に移住したという明治十五年には一歳であるので、少なくとも明治三十年頃、十五、六歳頃、奈良で二角に新陰流を学んだか、あるいは二角が柳生まで来て新陰流を教えたのかもしれない。

随筆はこの後、貫二叔父が笠置山中でよぼよぼな老人に会い、「旧藩時代から柳生新陰流を修業し」たというこの老人に「どうか一手を」と試合を申し込み、手もなく打ち負かされた話を伝えているが、長くなるので省略して、その先を引用しよう。

私も祖父が親友の杉岡政房翁に、柳生流修業の指導を頼んでくれたので、芳徳寺の本堂で、指導を受けることができた。三学（5）九箇（9）天狗抄（5）といわゆる「型」十九本を教えられ、あわせて試合の指導も受けた。杉岡翁、このころ七十余歳で、私は十五、六歳である。

柳生流では撃ち所はあまり制限はない。しかし勢法では小手を撃つのを、やかましく指導された。小手さえ斬れれば、先方の攻撃力がなくなるし、あえて生命を絶つには当らぬという考えであろう。

私が指導を受けた杉岡翁など、何かの拍子に、私が勇ましく「お小手ッ」と一本やると、さつと身を後へ引いて、右手を高くあげる引き揚げの姿勢で「お見事、お見事！」と賞賛して下さったものである。こうした態度は、江戸の柳生流道場の遺風だったのであろう。（後略）

（『奈良文芸』第二十号、昭和三十八年、奈良文芸社）

杉田定一が、新陰流を学んだ頃は柳生道場はなく、芳徳寺の本堂が道場代わりに使われたようである。

杉田定一は昭和四十三年から四十四年にかけて奈良新聞（当時は大和タイムス）に『いろは柳生物語』を掲載している。その中に次の記事がある。

世間では柳生流の竹刀のことを袋竹刀と呼んでいるが、正確な名称は『ヒキハダ』竹刀であり、その文字は韜竹刀と書く。

その製法は馬の皮をなめして袋をつくり、その中へ直径二・五センチぐらいの竹をはめこむ。そしてその竹を元の方で四つ割り、中程で八つ割り、先端は十六等分に割るのである。柳生流は素面素小手で、いわゆる防具を身につけないで試合もするし、勢法（カタ）も練習す

る。そのための配慮から工夫されたものである。しかし篭手（コテ）の代りに右手だけ手袋を用いたが、左手には用いないのが定めであった。もっとも時世の影響で、明治の末年ごろになると、名古屋の柳生流道場では防具を使用するようになったが、柳生では明治末から大正年間の初めごろまで、まだ素面素小手で、古老や若い者が新陰流と呼んで（柳生流の正しい名称）学校の校庭などで剣技を楽しんでいたものである。

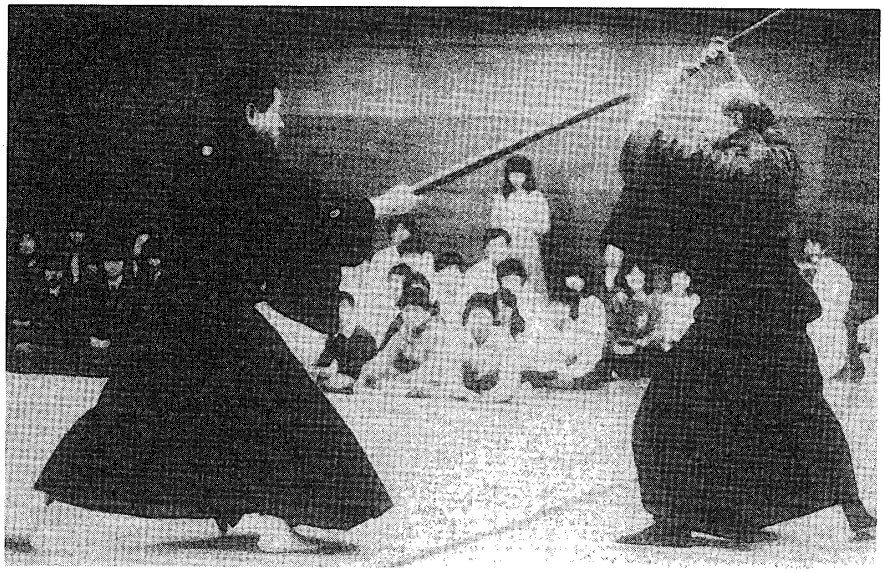
その寸法は大は三尺二寸、少は一尺三寸。しかし木太刀の場合は三尺三寸が定めであった。江戸城の城中で勤務につく柳生武士としては、小太刀の習練がとくに要求されたので、試合の場合、一方は大、一方は小太刀として稽古をする場合も多く、また名古屋柳生流では二刀流もとり入れていた。・・・

柳生武士とて剣道一筋に終始したので無く槍術も修行したことは、廃藩後になって古老の物語りに、文久年間将軍上覧の光栄に浴した三剣士の一人柳生喜七郎は、世が明治と変わっても昔ながらに武士のたしなみは忘れず、槍をひっさげて毎夜の様に、戸岩明神の深山におもむいて槍術の修練に励んだと伝えられる。

（収録『新版・柳生の里』柳生観光協会、平成十二年）

なお菊地秀行『ザ・古武道』「柳生魔剣行」（光文社文庫、一九九六年）では当時柳生の里に住まわれていた畑峯三郎氏を訪問し、「燕飛（えんび）」「一刀両段」「逆風」「乱剣」などの型を拝見した記事を載せており、「畑峯さんは江戸柳生の師から免許皆伝を許されている」（二三九頁）と書いている。私は柳生の里のあるお年寄りから「畑峯さんは、芳徳寺の前の和尚から、新陰流を習うのだったら神戸先生に習うようにと言われた」という話を聞いているので、畑峯氏に江戸柳生を教えた師範は、尾張柳生の師範でもあった神戸金七師範であったと思われる。

神戸金七師範は尾張貫流槍術の達人でもあり第七世を継いでいる。第八世は加藤伊三男師範であり、日本古武道振興会発行の『真鋭』（昭和五十五年一月）によると神戸金七は尾張柳生十三代の厳周から師範印可を受けており、それを加藤伊三男に継いでいる。尾張貫流槍術の道場である春風館（第九世は下村幸裕師範）では現在も神戸金七師範直伝の「柳生新陰流兵法」の稽古をしているが、それがどの系統の新陰流であるのか興味深い。



大野一英『こころの兵法――尾張柳生物語』には神戸金七師範について「厳周の時代から柳生の剣を磨きながら、厳長の姿勢を嫌ってか疎遠の仲になった」と書かれている。下条小三郎だけでなく神戸金七も厳周に学び、二人とも高弟でありながら厳長と袂（たもと）をわかっている。単に性格の不一致というより、厳周が伝えた技を厳長が変えてしまったのではないかと思われるが、現在、研究中である。

また昭和の初めに下条と共に厳長の元を去った大坪先生に、およそ二十年後になって厳長が尾張柳生の控宗家としての印可を与えた理由について、著者は鶴山先生に大坪先生の話として説明を受けているが、技術継承の問題もあるので詳細を研究中である。

ともかく厳長の元を去った三人が江戸柳生の印可も受けていることは興味深い。なお神戸金七師範に新陰流を学んだ畑峯氏は江戸柳生の稽古・研究を趣旨とする二蓋（にまい）会を主催しておられる。

鶴山先生が大坪先生に新陰流を学び始めたのは、電報電話公社に昭和四十六年、職場サークル「柳生新陰流研究会」を作った時からと思われる。先に引用した『図解コーチ合気道』の序文の冒頭で大坪先生は次のように記している。

> 隅田川を越えた電電公社両国道場（電電東京体育館）で、合気道部の若い人達に〝柳生新陰〟を講じはじめてから数年、熱心な部員は厳冬の柳生を訪れ、正木坂剣禅道場でいささか「新陰の心」を味わってもらっている。

当時、鶴山先生は電電公社の職場サークルである合気道部の師範であり、武田惣角――久琢磨と受け継がれた日本伝合気柔術の継承者である。

この後、鶴山先生は昭和五十六年五月二十四日に大坪師範より「柳生流天狗抄奥伝免許」、昭和五十九年には「柳生新陰流実技相伝」を受け教伝模様のビデオを収録している。

こうして鶴山先生は昭和六十年には大坪先生より「師範印可」を受けた。当時大坪先生より鶴山先生に宛てた書簡には「控宗家として師範印可を受けた昭和二十六年以後はじめて書帖免許を書きながら感慨深いものがあります」とある。大坪先生はそれまで講習会や演武会用に新陰流を教えたことはあったが、鶴山先生と稲益氏以外に弟子は取られていないようである。

鶴山先生と稲益氏は、昭和六十三年十一月十三日の墨田区体育館道場での総合武術合気会主催による演武会で、「江戸柳生保存会」として「尾張と江戸の刀法」の説明演武を行っている。

明治以降の江戸柳生についてはっきりしているのは次の通りである。

柳生藩十三代、柳生俊益、明治四年頃まで柳生藩で御家流の稽古。

中村二角、杉岡政房――柳生の里の道場で新陰流を指南。

神戸金七――畑峯三郎――二蓋会

下条小三郎――大坪指方――鶴山晃瑞
　　稲益　豊――赤羽根龍夫

また筑波大学武道文化研究会『新陰流関係資料　下巻』には、明治十二年、江戸柳生三代・柳生宗冬（むねふゆ）系の新陰流師範である津田武左衛門三友が大津為之雄三郎に出した「新陰流兵法太刀目録」が掲載されている。

なお江戸柳生十六代当主の柳生宗久氏は小城の鍋島本家・鍋島直幸氏とお二人で大坪指

方師範に江戸型の新陰流を鍋島家の菩提寺賢崇寺（東京麻布）で習い始められたが、稽古を始めて半年位で大坪師範が脳溢血で倒れられたため中断に至ったとのお話である。また宗久氏は奈良柳生町を訪問した際、畑峯三郎師範の門弟による江戸柳生の型の演武を御覧になっている。

明治以降の江戸柳生に対する歴史的な研究は今のところはここまでである。鶴山先生は「下条小三郎に江戸柳生を伝えた人が誰であるか分かれば、江戸柳生の継承過程はすべて明らかになる」と筆者に話されていた。

大坪指方師範に江戸柳生を伝えた下条小三郎、畑峯三郎師範に江戸柳生を伝えた神戸金七が誰から江戸柳生を学んだかは今後の研究課題である。なお二人をよく知る人の話では「神戸先生は大きな優雅な剣を使い、大坪先生は豪快な剣を使った」ということである。

江戸柳生について分かっていることは、以上のことだけである。筆者が非力ながらこの論文を提出するのは、これを機会に江戸柳生の情報を集めたいと考えるからである。

二

ここで江戸柳生の歴史をごく簡単に振り返っておきたい。詳しくは拙著『徳川将軍と柳生新陰流』（南窓社）を参照いただければ幸いである。

江戸柳生の祖・柳生宗矩と徳川家康との出会いは文禄三年（一五九四）五月三日である。当時大和の豪族・柳生家は秀吉の弟秀長によって検地の際の隠田を理由に所領を没収され、困窮を極めていた。そんな時に柳生家の当主・石舟斎宗厳は伏見城を構築中の秀吉に従って京都にいた家康から呼び出しを受けた。

柳生宗厳は、「諸流の奥源を究め、陰流において別に奇妙（極意）を抽出して」して新陰流を創始した上泉信綱に学び、師から課題として与えられた無刀取りを工夫して新陰流の印可を受け、柳生新陰流を名乗ることを許されていた。自らも奥山流、新当流などの印可を受けていた家康は刀を持たずに相手を倒す無刀取りに興味を持ったのである。

「天下布武」を掲げた信長はすでに本能寺で明智光秀に倒され、天下統一を成し遂げた秀吉はそこで矛を収めることが出来ないで無謀な朝鮮出兵を推し進めていた。二人の生き方を見ていた家康にとっての最大の難問は、天下を統一した後の武力の収め方であった。「武」は武士の拠って立つ基盤であり、それがなければ武士は武士として成り立たない。しかし武力を原理とするかぎり争いはなくならない。その矛盾を解決する方策を模索していた家康は、「無刀取り」ということを聞いた時、天啓のように閃くものがあったに違いない。「武」に精神性を与えること—家康の「元和偃武」（平和の時代が始まり武器を収める）の構想はこの時すでに出来上がったのかもしれない。

宗厳と宗矩の無刀取りの演武を見た後、剣術に自信のあった家康は自ら木刀をもって宗厳に立ち向かった。柳生家の記録である『玉栄拾遺』はこの時の様子を次のように述べている。

文禄三甲午の年、聚落紫竹村（京都大徳寺の北）にて宗厳公の剣術、始めて神君（家康）上覧。木刀を持ちたまい、宗厳是を執るべしと上意あり。即ち公（宗厳）無刀にて執り給う。その時、神君後ろへ倒れたまわんとし、上手なり向後（今後）師たるべしとの上意の上、景則の刀を賜いて誓詞を辱くす。時に五月三日也。かつ俸禄二百石を賜う。

家康が打ち込む木刀を無刀、つまり素手で取った宗厳に、家康は即刻、新陰流入門のための誓紙を与えた。

敬白　起請文の事

一、新陰流兵法相伝の事

一、印可なき以前は、親子といえども他言すべからざる事

一、その方に対し、疎意（おろそかにすること）あるべからざる事

右の旨偽るにおいては、日本国中大小神祇殊に摩利支天（護身などをつかさどる天女）、天当（太陽）の御罰を蒙るべきものなり。よって起請文くだんの如し。

文禄三年五月三日　　家康（花押）

柳生但馬入道殿

一般には、家康に仕官を勧められた宗厳は、六十六歳という年齢を理由に、自分に代わって子の宗矩を仕官させたと言われているが、私は二十四歳の若い宗矩を望んだのは、むしろ家康の方であったと思っている。

家康は剣法としての無刀取りを望んだのではない。その時以来、家康が柳生新陰流を学んだという形跡はない。家康は宗矩に剣を学ぼうとしたのではなく、自分の考えに通じる発想をもった剣法を身につけた宗矩を自分の近くにおいて、自分の生き方や考え方を学ばせて、宗矩に泰平の世の新しい剣の理念を確立させようとした、というのが私の考えである。こうして二十四歳の若い宗矩は、この日から二百石で家康の側近として仕えることになった。

それから五年あまりの家康の側近としての宗矩の事跡については今のところ何の資料もない。次に宗矩が歴史の表面に上がるのは。一六〇〇年の関ヶ原合戦の直前、石田方の後方撹乱を家康に命じられた、父・宗厳への書状を持って柳生の里に帰った時である。宗矩はこの時の働きで旧領二千石を与えられ、翌年さらに千石の加増があり二代将軍秀忠の兵法指南になった。その際、家康は秀忠に「一刀流は剣術なれども柳生流は兵法なり。大将軍たるものすべからく大将軍の兵法を学ばれよ」と命じている。

次に宗矩が記録に上るのは、大坂夏の陣で秀忠の馬前に迫った敵三十五人のうち七人を倒した記録である。

東軍騒擾して甚だ危うし。時に城兵（西軍）木村主計、素肌（無防具）武者三五人を連合して秀忠に迫る。柳生宗矩その馬前に立ち七人を斃し、進んで死戦す。

元和七年（一六二一）、宗矩は家光の兵法指南となる。家光十八歳、宗矩五十一歳の時である。家光は剣術に並々ならぬ興味を示し、弟国松を溺愛した秀忠に疎んじられていた家光は、宗矩に我が父のごとき親愛の情をかけた。

宗矩は単に家光の兵法指南であっただけでなく、寛永九年（一六三二）、秀忠が没すると大目付を命じられ幕政に深くかかわり、寛永十三年（一六三六）には一万石の大名になっている。

家光がいかに兵法熱心であったか、宗矩がいかに我が身を捨てて家光の薫陶に当たったかは拙著に譲りたい。家光は常に「わが天下統御の道は宗矩に学びたり」と言い、宗矩の死後、なにか事があると「宗矩がいたら相談するのに」と語ったという。

江戸柳生二代は宗矩の長男・十兵衛である。元和五年、十三歳の時、十六歳の家光の小姓となり、三歳上の家光の手ごろな剣術相手として「寵遇はなはだ厚」かったが、寛永三年（一六二六）、家光の怒りをかい追放されたと言われている。しかし私は家光ではなく宗矩が十兵衛を家光から離したのだと思っている。

二人は恰好の剣術相手であり、家光は早熟の天才とはいえ三歳年下の十兵衛を何とか打ち負かそうと夢中で修行したことであろう。

それを宗矩は危険と見たのである。泰平の世の剣法は、相手を打ち負かすものではなく、法が破られたとき初めて抜かれる正義の剣であり、身分制度の頂点に立つ武士としての人間修養の道でなければならない。まして将軍が学ぶ兵法は、個人を相手の小なる兵法ではなく、国を治めるための大なる兵法でなければならない。それが、「弱冠にして天資はなはだ梟雄（残忍な傑物）、早く新陰流の術に達し」と言われた十兵衛と「暴くれで誰の手にもかからぬ三代将軍」と言われた家光の稽古をみていると、まるで果し合いのような激しさがあった。これでは家光が将軍として大成するために剣術がかえって障害となり、家康が自分を家光の兵法指南とした遺命が果たせないことになってしまう。

そこで、家光ではなく宗矩が、わが子十兵衛を家光のもとより退けたのである。しかし十兵衛をただ無用のものとして退けたのではなく、柳生新陰流を泰平の世の兵法として完成することを課題として与えたのである。

十兵衛は「めぐるとし十二年は古郷を出でず。・・・明けくれ兵法の事を案じ」、ひたすら柳生の里で柳生新陰流の刀法、心法の修行を続け、その成果を『昔飛衛という者あり』にまとめ、沢庵の添書きと共に宗矩に提出して印可を受け、寛永十五年、十二年ぶりに御書院番として家光のもとに再出仕するが、ほどなく退出を願い出て柳生の里に戻り、四十五歳の早い死まで全国から集まった一万三千五百人余の門弟を指導した。大坪先生によると、その道場は泰平の世の武道を学ぶ全国の武士のための教育機関であったと言う。

柳生家三代・柳生宗冬は元和元年（一六一五）、大坂夏の陣の年に宗矩の三男として生まれた。十四歳で家光の小姓になり、十八歳のとき喜多十太夫の猿楽能を見て、その入神の芸に深く感じるところがあり、日夜剣術に励み新陰流の道統を継ぐに至った。慶安四年、兄十兵衛の急死により柳生家三代当主となった。

明暦二年、四代将軍家綱（十六歳）の兵法指南となり、寛文元年には後の五代将軍綱吉（十六歳）から新陰流入門の誓紙を受け、寛文五年には将軍家綱（二十五歳）に新陰流の免許皆伝を与えている。寛文九年、柳生藩は一万石の大名の地位に復活した。

宗冬は晩年、池水に陰を落す柳の木の下を散歩していた時、水の中のぼうふらの動作を見て剣術を工夫し、深く悟ることがあり、画師にその絵を描かせた。

戦国時代の余韻が残った武断主義的な時代に活躍した宗矩、十兵衛に較べて、主として文治主義政策を取った家綱時代に活躍した宗冬は剣を振るった記録もなく、あまり評判がよくないが、宗冬は江戸時代の武道の様式化に対して重要な役割を果たしており、柳生藩が幕末まで大名の地位を保った理由は宗冬にあるといえる。

宗冬の長男宗春は九歳で家綱の前で剣法を演じ、寛文五年、十七歳からは一月三日の剣術始めには父宗冬と共に家綱（二十五歳）の相手をし、それ以来、常に宗冬とともに家綱の稽古の相手をしている。宗春は、性質は優美で新陰流に優れ、和歌を詠み、まさに模範となるべき好青年であり、父宗冬は芝新堀の邸で門弟を教え、宗春は虎ノ門の邸で門弟を指導したが、長者の風格のある宗春の方に門弟が多く集まったと『玉栄拾遺』は伝えている。しかし疱瘡に罹り父に先立って二十七歳で亡くなった。したがって柳生家四代当主は宗冬の二男・宗在が継いだ。

柳生宗在は父の死により二十二歳で四代将軍家綱の兵法指南になり、以降、延宝四年から八年まで一月三日の剣術始めには家綱の相手を勤めた。

この間、延宝五年には甲府綱豊（後の六代将軍家宣）から新陰流入門の誓紙を受けている。さらに延宝七年には松平淡路守ほか多数の諸侯が宗在に入門している。しかし家綱は病弱であり、宗在が柳生家当主となってからは正月三日の稽古始め以外には剣術の稽古の記録はなく、延宝八年、四十歳で没している。

五代将軍綱吉は正保三年（一六四六）、家光の四男として生まれ、十六歳で柳生宗冬に新陰流入門の誓紙を与えている。兄家綱の死で将軍になった時は三十五歳である。この時、柳生家四代宗在は二十六歳である。『綱吉実紀』にある綱吉と宗在のかかわりは以下の通りである。

延宝八年（一六八〇）十二月、柳生宗在に剣技のこと奉るにより時服三下さる。

天和元年（一六八一）二月、御座所で剣法を試みる。よって柳生宗在、候す。

二年（一六八二）九月、柳生宗在が綱吉に剣術秘伝の書ならびに粟田口国吉の脇指を献じたので、御座所に召して正恒の刀と時服を給う。

以上だけであり、元禄二年（一六八九）、柳生宗在は三十六歳で没してしまう。柳生五代は宗春の嫡男で十七歳の俊方が継いだ。この時、五代将軍綱吉は四十四歳であり、いかに柳生家当主といえ十七歳の若者に剣術を学ぼうとは思わなかったに違いない。それに俊方は家伝の新陰流の修行が充分でなかったとみえ、元禄十二年には「伝家の刀法精研せよ」と、大名としての奥詰の役を一時免除されている。

しかし綱吉自身は若い時から学んだ新陰流の稽古を熱心に続けている。元禄六年十二月三日、綱吉(四十八歳)は柳沢吉保の屋敷で、『論語』と『中庸』を講義した後、新陰流の稽古をしている。『綱吉実紀』を見てみよう。

（柳沢）家臣柳生内蔵助剣術を得たる旨聞こし召して、御覧あるべしと仰せ出され、内蔵助その流の秘伝三学の太刀といえる術を進覧す。また御みずからも御太刀あり、内蔵助御相手つかまつる。

この後も、

元禄八年九月六日、御座所にて御剣術あり。柳沢保明（吉保）の家臣二人御相手にめされ、各時服一襲ずつ賜う。

同　九年十月二日、今日御太刀打あり。柳沢保明の家臣大原丈右衛門御相手つかまつる。

同十二年閏九月二十一日、（柳沢邸で）家臣柳生内蔵助、新陰流兵法「玉成秘書」を講ず。時に先年、故柳生宗冬に剣法学ばせ給いしとき、宗冬が授け奉りし説に符合したりとて御感あさからず。よって「玉成集」ならびに宗冬より内蔵助に授けたる印可状を御覧に備う。時に柳生俊方、御側にありて、この書は上泉信（秀）綱、柳生宗厳、宗矩、十兵衛三厳、宗冬より内蔵助にいたり、五伝なりと聞えあげれば、いよいよ御けしき（ご機嫌）大かたならず、俊方ならびに内蔵助に仰せあり、三学九個の小刀をつかうまつらしめらる。また家臣大原丈右衛門も三学九個、天狗抄、猿飛の術を御覧にそなう。

大坪先生は、江戸柳生の剣術は実技よりも将軍学としての講義が多かったと常々語られている。その発言の文献的根拠は示されなかったが、この記事では柳生内蔵助が『玉成秘書』を綱吉に講義しており、綱吉も若い時に宗冬から聞いた講義と較べている。大坪先生の「江戸柳生は将軍学であ

る」（大坪指方『柳生新陰流の神髄』）という話しはこんなところから来ているのかもしれない。

柳生内蔵助は柳生家の家老であったが、不行跡が原因で柳生家を追放になった後、柳沢吉保の家来になっている。柳沢吉保の寵愛を利用して柳生家の当主の座を狙うなど、いろいろ問題の多い人物ではあるが新陰流には長じていたようである。（詳しくは拙著『徳川将軍と柳生新陰流』）

この後、宝永二年（一七〇五）、柳生俊方は三十三歳の時、多病で剣術修行が出来ないので岡部美濃守の次男・宗盈（十四歳）を養子にして家業の新陰流を修練したいと幕府に願い出る。宗盈は新陰流の修行に励んだが二十四歳の時に病気で実家に戻されている。俊方は六代将軍家宣、七代将軍家継の時代も柳生家五代当主に留まり、五十八歳の死によって三人目の養子俊平に家督を譲ったのは八代将軍吉宗の治世の中頃の享保十五年（一七三〇）年のことであった。

病弱であり家業の新陰流の研鑽もままならない身でありながら将軍家四代にわたって俊方が柳生家の当主であったことが江戸柳生家の不運であった。

六代将軍となる家宣は甲府徳川家の嫡子であり、十五歳で元服し、翌年、柳生宗在（四代）に新陰流入門の誓紙を与えている。元禄十二年、三十八歳の時、いつでも新陰流の稽古が出来るようにと、柳生家家老・村田久辰を俊方から譲り受けた。宝永六年（一七〇九）、家宣が六代将軍になると、村田久辰・久寿親子は将軍の側近となった。

家宣が将軍に就任した翌年、柳生家五代当主・柳生俊方は養子の宗盈と共に兵法を上覧に供している。『玉栄拾遺』によると、新陰流演武を「御座間において将軍家（家宣）は上壇を下りたまい、御右手を畳につきたまい、上覧」したとある。大坪先生はこの箇所を講演や談話で何度も引用し、「これを見ても、いかに柳生新陰は格の高いものであったかがわかる」（「兵法家一族の流れ」）と言う。

しかし著者の調べた限り『玉栄拾遺』『徳川実紀』その他にも、この時以外に将軍が同じように畳に手をついて新陰流を上覧した例は見当たらない。

家宣は新井白石から講義を受ける時も、真夏の暑い最中でも裃をつけ、白石より九尺ほど下がって席につき、蚊も払わずに二時間以上も姿勢を崩さずに白石の講義を受けた。新陰流に対する礼も家宣独自の考えから出たものと思われる。

将軍の侍座に控えたのは御用人の間部詮房と村田久辰で、その後門弟の小姓たちも加わっている。初めは俊方が使太刀、打太刀は宗盈。次に宗盈が使太刀、打太刀は村田久辰。終わって俊方、宗盈が将軍から時服を賜っている。

昼に退出の時、老中、間部詮房、若年寄に挨拶回りをし、帰館のとき取次以上は麻裃、近習は向裏つき裃を着て、徒士頭以上の家来に吸物・酒、それ以下の者には酒肴を振舞った。

二十二日には俊方と宗盈は上野と広徳寺にお礼の参詣をし、二十五日には俊方が鮮鯛三、宗盈が鯉二匹献上し、献上が滞りなく済んで老中方にお礼回りをした。三月一日には江戸と柳生の里の家来に兵法上覧の祝儀料理を振舞った。

将軍家の兵法指南である柳生家が、将軍の前で兵法を上覧に供することで藩をあげて喜んでいる姿が彷彿とする。四代将軍・家綱の時代までとは昔日の感がある。

六代将軍家宣は学問を好んだだけでなく、柳生新陰流を将軍学として学んだ。しかし健康に恵まれず、将軍になったのも四十八歳という高齢であ

り、将軍在任期間は三年という短命政権であった。このことは柳生家にとっても不運であったと言わざるをえない。

村田久寿は播磨守に任じられ、その後、柳生の家号を願い、柳生家もそれを許し、村田家は正徳二年（一七一二）より柳生を名乗るようになったが、柳生家では後々まで家来扱いをした。

七代将軍は新井白石の進言により、家宣の子の家継が就任した。しかし家継はこの時、三歳九ヶ月であり、三年後には没してしまう。家継時代は俊方が引き続いて柳生家の当主であるが、歴史の表面には全く現われていない。一方、村田柳生家は近臣の役を前代から引き継ぎ、正徳四年（一七一四）には久辰は布衣（官位の六位相当）を許されている。

正徳五年、俊方の養子であった宗盈が病気のため実家に戻されている。

七代将軍・家継が八歳で没することにより二代将軍・秀忠以来の将軍家の血筋が絶え、八代将軍は御三家の紀州藩主・徳川吉宗が迎えられた。このことは将軍と新陰流との関係にも大きな影響を及ぼすことになる。

八代将軍・吉宗は享保元年（一七一六）、三十三歳で将軍に就任し、六十二歳で将軍職を長男の家重に譲るまでの三十年もの間、将軍職にあったが、『徳川実紀』には将軍家兵法指南役としての江戸柳生家と吉宗とのかかわりは次の享保十一年九月十二日の一度しか見えない。

大納言殿（家重）と共に、黒木書院に出給い、柳生俊方家に伝えし剣技（新陰流）を御覧ぜられ、持弓頭・小野次郎右衛門忠一の剣技（一刀流）、寄合・山本加兵衛久豊の槍技を御覧あり。よって忠一・久豊には時服三、俊方に時服五をたまい、敵手（相手）をつかうまつりし俊方の門人、寄合・柳生久寿、山名豊峯、忠一の門人、小姓組・松平半十郎勝央、忠一の子・小姓組助九郎忠久、久豊の子・務兵衛久和に各時服二を給う。

紀州徳川家の出である吉宗は将軍家の兵法師範である江戸柳生や一刀流には関心を示していない。したがって徳川家の正史である『徳川実紀』には剣術の記載がないのである。しかし吉宗は剣術に興味がなかったというわけではない。そこで吉宗と剣術とのかかわりを調べるために『南紀徳川史』を見てみよう。

紀州徳川家の剣術は竹森流（新当流）、田宮流（居合）、西脇流、金田流の四流が行われ、江戸時代後期には柳剛流、浅山一刀流が加わっている。

西脇流の祖は、紀州藩祖・徳川頼宣（徳川家康の十男）の家来・西脇猛正である。猛正は主命により小夫助永の門に入り新陰流を修行している。

小夫助永について『南紀徳川史』は「但馬守（宗矩）家に縁これあり一家同前たるに依りて残さず秘伝口決（訣）まで相伝えたり」とあり、柳生宗矩と十兵衛より新陰流の極意を相伝して、元禄三年から四百石で紀州家に仕えた。しかし孫の時に不行跡をもって小夫家は改易されたので、紀州藩の新陰流は西脇家が継いだ。

西脇猛正は紀州藩二代藩主・光貞の三男で紀州四代藩主となった頼職が八歳の時から西脇流（新陰流）を教えている。さらに元禄五年には光貞の四男つまり吉宗の剣術師範となっている。しかしいつまで吉宗が西脇流を稽古したかは不明である。

吉宗は将軍になってからも武芸を奨励し、優れた武芸者を多く取り立てた。剣術は「木村左衛門某」を取り立てている。この木村左衛門某が誰であるかは明らかではない。しかし別の史料によると西脇猛正の高弟・木村佐左衛門是興という人物が江戸で西脇流の師範をしているので、将軍吉宗が取り立てた「木村左衛門某」は西脇流の木村佐左衛門是興その人であるか、また是興に極めて近い人物で、西脇流の師範であることは間違いないと思われる。

長男・家重は病弱であったので、吉宗は二男の田安宗武をことのほか可愛がり、幼少の時から文武の修行をさせている。吉宗がつけた剣術師範は小出（山本か）八郎右衛門、小林左十郎などの名が挙げられる。この二人が何流の師範かは明らかでないが、吉宗は孫の家治（後に十代将軍）に大納言時代から柳生（村田）久寿をつけて新陰流を学ばせているし、その近臣にも新陰流を習うように命じている。また田安宗武は自分の子供の定信（松平）に西脇流（新陰流）の木村佐左衛門是有をつけている。したがって吉宗が二男の田安宗武につけた剣術師範も西脇流の新陰流であったことは間違いないと思われる。なお西脇流の新陰流は試合も行ったようである。松平定信の時代にもその記録があるし、『南紀徳川史』には「新陰流稽古道具」として防具のイラストが載せられている。

後のことになるが十五代将軍となる水戸藩主・徳川斉昭の子・慶喜が十一歳で一橋家に入った時につけられた剣術師範は、一橋家と同じ八代将軍吉宗によって創設された御三卿の一つである田安家の剣術師範・木村佐左衛門是茂である。吉宗は将軍家の剣術師範である江戸柳生家の当主の剣の実力が低下しているので、紀州藩に伝わる柳生宗矩・十兵衛直伝の柳生新陰流であり、自らが九歳の時から学んだ西脇流を将軍家の家族扱いである御三卿に伝えようとしたのであろう。

元禄二年（一六八九）、五代将軍綱吉の時代に柳生家五代当主を継いだ柳生俊方は、吉宗時代の中頃の享保十五年（一七三〇）まで四十一年間、柳生家の当主であり続けた。病気勝ちで家業の新陰流の稽古が充分でない俊方は養子を迎えて柳生家を継がせようとしたが、最初の養子が病気で実家に帰され、二番目の養子は早世し、三番目の養子として迎えた俊平が俊方の死によって享保十五年に柳生家六代当主となった。しかし俊平も吉宗が将軍職を辞す一年前に致仕（辞職）し、信濃松代藩十万石・真田信弘の四男・俊峯が柳生家七代当主となっている。

この間、六代将軍・家宣、七代将軍・家継の時代から力を伸ばしてきた村田柳生家が剣だけでなく政治的にも実力を発揮するようになっている。

柳生久寿は徒頭（かちがしら）から西の丸目付となり、延享二年（一七四五）、吉宗が隠居して家重が九代将軍となると、柳生久寿は大納言（家治）付きとなり、八年後に家治が十七歳になると、世子家治に新陰流を教えよという命令が吉宗の指示で下る。家治は父・家重が宝暦十年（一七六〇）に将軍職を辞任したのを受けて、二十四歳で将軍になった。

明和六年（一七六九）、柳生（村田）久寿の嫡孫・久通は西の丸近臣に新陰流を指南するように命じられ、九年後には、西の丸槍奉行となった柳生久寿と西の丸小姓となった久通が、将軍家治の世子・家基に新陰流稽古の相手をするようにと命じられている。しかしこの時十七歳であった家基は、翌年急死してしまう。

それから三年後の天明二年、目付・柳生（村田）久通は「家伝刀剣の技あるをもって」、つまり代々柳生新陰流の技を受け継いでいるので、明和六年に続いて再度、西の丸の小納戸六人を弟子とするようにと命じられている。これは天明元年、田沼意次（おきつぐ）の強力な政治力により一橋家から家斉（いえなり）を迎えて世継ぎとしたので、家斉の親衛隊ともいうべき小納戸（こなんど）衆に新陰流を学ばせて家斉の稽古の相手をさせようとしたのだと思われる。田沼意次の考えであろう。

結局、吉宗の時代から、同じ宗矩、十兵衛伝の新陰流ではあるが紀州家に伝わる西脇流が御三卿に伝えられ、江戸柳生家の家来筋から出た村田柳生家が将軍の世子を教えるようになったのである。

さて天明の大飢饉による社会不安が増大し、田沼親子に対する不満が高まり、天明四年、田沼意次の子の意知が江戸城中で佐野善左衛門により刀

で刺される事件が起こる。このとき大目付と共に善左衛門を取り押さえたのが柳生久通であった。久通はその後、小普請奉行、町奉行となり、天明八年には老中・若年寄につぐ幕府の要職である勘定奉行となり、二十九年もの間、幕政に深く携わるようになる。

以上見て来たように、八代将軍から十代将軍まで将軍と江戸柳生家との剣における関わりはなかったが、十一代将軍家斉から再び江戸柳生家の当主と稽古をするようになった。杉田定一『柳生六百年史』に、一八四六年、柳生家十代当主・俊章が幕府に提出した『柳生藩系譜書』が『柳生系図』として引用されている。

天明八年二月三日、柳生俊則（柳生家八代）、将軍家斉へ剣術の御相手命ぜらる。

同　年二月十一日、この度柳生俊則、将軍家斉の御相手命ぜられしに付、今日鳥居丹波守宅にて誓詞仰せ付けらる。

同　年二月二十六日、将軍家斉、御座の間において柳生俊則謁し奉り、次いで剣術を上覧に供し、続いて将軍家斉の御相手を勤め時服三拝領す。その後、平日将軍御稽古の節登城し、御座の間において御相手を勤む。かつまた奥向の衆稽古に付き、田安植溜稽古所へも折々罷り出ずべき旨（もつとも家来の者も差し出すべき旨）仰せ付けらる。

同　年十二月七日、柳生俊則、平日将軍御相手勤めし褒美として時服三領拝領す。この後年々十二月中時服三ずつ拝領す。

同　年十二月二十八日、柳生俊則、常々植溜奥向の面々剣術指南仕まつるに付、将軍家斉より御内々巻物三拝領す。同日また植溜稽古の節、罷り出ずる家来の者へ白銀二枚ずつ賜う。この後年々の例となる。

寛政元年四月二十七日、柳生俊則、将軍家斉に奥義二十七ヶ条申し上げし賞として巻物三将軍より拝領す。

同　三年五月九日、柳生俊則、将軍家斉へ新陰流太刀目録並びに奥義書物献ず。

同　年五月二十八日、柳生俊則、将軍家斉より肥前国正広の刀一腰を賜う。

同　八年十月八日、柳生俊則は将軍家斉に極意六本を伝う。

これを見ると将軍は決められた日以外に、平日も稽古をしていたことが分かる。また柳生家の当主は田安門の近くにある植溜稽古所で将軍の近臣に稽古を付けに、時折出向き、その際には当主だけでなく柳生家の家来が稽古を付けていたこと、そして十二月には柳生家の当主だけでなく家来も褒美の品を拝領していたことが分かる。

将軍家斉は天明八年（一七八八）、十六歳で柳生俊則に新陰流を学び始め、八年後の寛政八年（一七九六）、二十四歳で新陰流の極意を受けている。『史料柳生新陰流』、『定本　大和柳生一族』など江戸柳生の研究でも優れた業績を残している今村嘉雄は「十一代家斉以後は、時に将軍の相手を命じられる程度で、大名としての雑用に追われ、兵法に専念することは、いっそう困難になる」（『柳生遺聞』）と言う。しかし以下に述べるように「時に将軍の相手を命じられる程度」というのは事実に反するし、「兵法に専念することは、いっそう困難になる」とすることは江戸時代の身分制度を支えた世襲制度に対する認識に欠けている。将軍家の兵法指南である柳生家において兵法に専念することなしには家の存続は成り立たないのである。

松浦静山『甲子夜話』には、将軍家指南番である江戸柳生の当主が将軍

に対しどのような稽古の仕方をしていたのかをうかがわせる興味深い話が載せられている。松浦静山は肥前（長崎県）平戸藩主でありながら心形刀流の達人であり、『剣談』『剣攷』などの優れた剣術の解説書もあり、江戸時代を代表する武芸家である。

私が柳生俊則と知り合った時、俊則は七十歳に達していたが、衰えることなく勤めていた。私はこの頃から剣術が好きであったので、ある日、俊則にあなたの家の剣法について話して聞かせてくだいと言ったところ、俊則が言うには、たやすいことですが、我が家の剣術は上（将軍家）の御流儀なので、話すことも堅く戒めている。そこで私は、それならば禁言の誓詞を書くので聞かせてくださいと頼んだ。俊則が言うのには、それは出来ない。あなたがご自身の流儀を止めて私の家の剣法を学ばれるならば、新陰流の趣旨を述べましょう。

私はさすがに心形刀流も捨て難く、そのまま聞かないで今日に至っている。当時を顧みると惜しいことをしたと思う。私はまた、上（将軍）に教え奉るにはどのようになさるのですかと質問したところ、俊則が言うには、お教え申すとは言わないで、お相手と称します。私はまたどのようになさるのですかと質問すると、剣法のことはすこしも言うことはできないけれど、部屋で衣服をあらため、湯衣を着て、袴はもちろん襷（たすき）を掛けてお相手を仕るのです。その心配（気苦労）を推察してください。お相手を終えて部屋に退くと、ため息をついて汗をぬぐうのですと語ったことである。

柳生俊則（八代当主）は文化四年（一八〇七）、七十八歳で致仕（辞職）し、大和郡山藩十五万石柳沢保光の六男が柳生家九代当主・柳生俊豊となり、俊豊は翌年から将軍家斉の世子家慶（十六歳）の剣術相手を命じられている。

俊豊も決められた日以外、平日にも稽古の相手をし、八年後の文化十三年（一八一六）に家慶（いえよし）（二十四歳）に免許皆伝を与えている。しかし俊豊は文政三年に三十一歳で没し、嫡男俊章が柳生家十代当主となっている。俊章は十二歳であったので将軍家の稽古には出向くことはなかったが、柳生家の家臣は近臣の稽古のため植溜稽古所に出向いていた。俊章も六年後、十八歳になると田安植溜稽古所に罷り出るように命じられている。

家慶は天保八年（一八三七）、四十四歳で将軍になった。その三ヶ月前にはモリソン号事件があり、三ヶ月後には「蛮社の獄」が起こるという風雲急を告げる中で、十二代将軍家慶は家斉に続いて頻繁に武技上覧を行っている。

村田柳生家の久包は天保十二年（一八四一）に長崎奉行になり、「異国船打払令」が無謀で人道的でないことを上申し、幕府は次の年に打払令を撤去している。久包はその後、伊勢山田奉行や一橋家家老を経て、弘化三年（一八四六）、大目付に就任している。江戸柳生家の祖・柳生宗矩が最初に就任した大目付に村田柳生家がなったことは村田柳生家にとって大きな喜びであったに違いない。

嘉永二年（一八四九）、江戸柳生家十代当主・俊章が病気のため致仕し、俊能（遠江相良藩一万石田沼意留の男）が柳生家十一代当主となったが、俊能は翌年没し、俊順（交代寄合武田信之二男）が柳生家十二代当主となった。そして三年後の嘉永六年（一八五三）にペリーの来航を迎えるのである。

『旧事諮問録』（旧東京帝国大学史談会編）に、十二代将軍家慶の御小姓や十三代将軍家茂の御側御取次ぎなどを勤めた旧幕臣・竹本正明からの聞き書きが載せられている。そこに将軍の日常生活が書かれてあり、将軍の剣術の稽古に言及している。

さて、神棚の御拝を仕舞ってお帰えりになると、不断着にお着替えになる。ここが少し余裕のある所で、そこで林大学頭の御前講という

ことがあります。御座の間へ出て経書の講義をお聴きになる。または奥儒者が御休息の間で経書の講義をいたし、御記録物と称える三河後風土記、その他の歴史を読んで付言でもしたりするのをお聴きになる。それから柳生但馬守が出て剣術のお稽古をなさる。私共が勤めた中で、慎徳院殿（十二代将軍家慶）などは六十一歳で御他界になったが、晩年に至るまでもやはり経書の講義を聞き、弓馬槍剣を講ずる事は、しなければならぬことになっておりました。

老年に至っては、少しは修業より運動のためということになったのですけれど、必ずすることの法が立っているので、ずいぶん束縛されたものでした。けれども、考えればおとなしかったのです。それから小南市郎兵衛が出て槍の稽古。五十三間という馬場があって馬に乗られる。また大的を射られるとか、御休息の間の入側で巻藁を射られるとか、こういうように五ツ半時（九時）から何や彼やあって、それが昼まで・・・・。

これで見ると将軍の日常生活はなかなか多忙であったようで、形式的なものと思われがちな武術に関しても、一般の武士よりも頻繁に稽古していたことがうかがわれる。

さてペリー来航の直後、十二代将軍家慶が没し、十月に家定が十三代将軍に就任する。

それより前、天保十年（一八三九）、柳生家十代俊章は世子家定（十六歳）の剣術相手を命じられ、十年後の嘉永二年（一八四九）に世子・家定に免許皆伝を与えている。家定は嘉永六年（一八五三）、三十歳で将軍に就任するが、翌年の安政元年（一八五四）に柳生家十二代・柳生俊順が将軍家定の剣術相手を命じられる。安政三年（一八五六）、男谷精一郎を剣術師範として講武所が創設され、家定は翌年講武所を訪れるが、安政五年（一八五八）、三十六歳で没する。

十四代将軍家茂（いえもち）は、紀州藩主徳川斉順の長男で、四歳で紀州徳川家を継いだ。安政五年に十三歳で将軍世子に迎えられ十一月に将軍に就任するが、その直前の十月に、柳生俊順（十二代）が家定に続いて家茂の剣術相手を命じられている。これまでは十六歳が将軍世子の稽古初めであったが、急遽（きゅうきょ）命じられたのである。武士の統領としての将軍になるためには、柳生家当主から新陰流を学ぶことがいかに重要視されたかを物語っている。

現柳生家十六代当主・柳生宗久邸には、文久元年（一八六一）九月二十日付けの柳生家の家臣・広瀬小大夫、木元太郎八、柳生喜八郎の三人が将軍家茂に剣術を上覧に供した書付が残されている。家茂は江戸城の吹上庭で上覧した。この時の様子を杉田定一が、広瀬小太夫の手記をもとに『いろは柳生物語』で興味深く描いている。

時しも頃は文久元年（一八六一）九月二十日、江戸城の空は小春日和の日本晴、五ツ時（午前八時）に霞ケ関の上屋敷（今の防衛庁辺）を御供揃えして出で立った柳生但馬守の一行は静々し半蔵冠木門へと進んで行く。

但馬守俊順は二十四歳の青年大名で平服である。・・・・・

門外で草履にはき替え、門内に入るや但馬守は平状の礼を執る。三人の剣士その跡につき従って、御番所下役に鑑札を示し名札を差し出すと、同所小頭大原徳次郎は御琴麗（りんり）（袋竹刀）箱を受け取る。新御門では御小人目付きより案内があって但馬守は御琴麗箱を御控所へ差し置く。お刀もその中へ入れられた。三人も琴麗箱を控所に差し置き、大小や懐中物を中へ入れておく。・・・・

昼食の時刻が来たのでお弁当が出た。但馬守は三重の御小蓋付で、三人は折詰である。

夕七ツ時（午後四時）に、淡路守の案内でお場所の御幕外の控所まで相進みゆく。

琴麗（袋竹刀）は服紗包みとして持参し着座し暫らく待つうちに、福村淡路守が案内に現れて但馬守は帯刀のままで所定の席へつかれた。三人はこれにしたがう。場所は吹上の御庭であり将軍の上覧の屋形は、場内の東方に西面して一段小高く設けられて、十四代将軍徳川家茂がやがて着座せられる。

いよいよ法の実演となる。張りめぐらされたまん幕の端で三剣士は進退共に平伏の礼を執り幕内へ入る。試演の番組は次のとおり。

表の形より八木まで（八木は燕飛の型のことを意味するのである）

太刀打　柳生喜八郎　遣太刀　広瀬小太夫
同　広瀬小太夫　同　木本太郎八
同　木本太郎八　同　柳生喜七郎

奥三本より、奥義まで、

打太刀　柳生喜七郎　遣太刀　広瀬小太夫
間打（ひうち）　木本太郎八
打太刀　広瀬小太夫　遣太刀　木本太郎八
間打（ひうち）　柳生喜七郎
打太刀　木本太郎八　遣太刀　柳生喜七郎
間打（ひうち）　広瀬小太夫

袴の股立ちは取らずに、礼儀正しき実演であった。なお、将軍のお好みによって、相寸仕相も五本実演された。これは柳生喜七郎と、広瀬小太夫がおこなった。こうして上覧はとどこおりなく終了した。一行の藩邸帰着は暮六ツ時であった。さて先の間打であるがこれを少し説明しよう。柳生流は型剣術であるためにその欠陥を補うために考えられたもので、第三者が試演の両者を監視して、警告の打ちを入れることをいうので、或る意味では審判でもあるのだ。どちらでもいけなかった方を、間髪を入れずに容赦なく撃つので、これを称して間（ひ）を入れるといったのである。

翌二十一日に但馬守は御礼廻勤をした。御老中、御側御用人、御用方等へ。

越えて十月四日、将軍から剣士一人毎に銀弐枚宛の賞賜があった。

嗚呼しかしこの後僅かに七年にして徳川幕府は滅亡し、広瀬小太夫は切腹して相果てた。（『新版・柳生の里』より）

さてこの柳生俊順は、十二月には家茂の剣術相手を勤める賞として時服を賜っているが、翌年の文久二年（一八六二）に二十七歳で没してしまう。

平成十一年春、『徳川将軍と柳生新陰流』をお贈りしたのをご縁として念願の柳生宗久邸を訪問させて頂いた。その時、柳生家に遺された資料を拝見した中に、日付のない俊順の『新陰流口伝書』一冊と、全く同文の『太刀目録』四冊を目にした。これらは恐らく俊順が将軍家茂に贈るために準備したものと思われる。

しかし俊順はその前に二十七歳で没してしまったために、この口伝書と目録は家茂には献上されず、その下書きと共に残されたのであろう。さらに家茂は次の年の文久三年（一八六三）には上京し、三年後には大坂城で二十一歳で没しており、さらに柳生十三代を継いだ俊益（後に俊郎）は家茂が没した時には十六歳の少年であった。結局、家茂は新陰流の印可は受けないで終っている。

十五代将軍となった慶喜は、天保八年（一八三七）、水戸藩主徳川斉昭の七男として生まれている。五歳から斉昭が作った藩校弘道館に通い始め、

剣術は水府流を学んでいる。水府流は「一刀流、新陰流、真陰流が、藩主の命によって合併し」（『武芸流派大事典』）たもので、斉昭が流祖とされている。

慶喜は十一歳の時に十二代将軍家慶の内意により一橋家を相続した。『新稿一橋徳川家記』に「田安家奥詰・木村佐左衛門を相手として剣術稽古始めを行う」とあるように、一橋家に入ってからは八代将軍吉宗が創設した御三卿に伝えられた西脇流の柳生新陰流を稽古するようになる。四年後には木村佐左衛門から新陰流の伝書を受け、嘉永六年には十七歳で新陰流の免許を受けている。

勘定奉行・川路聖謨が十九歳の慶喜を評して「唯今までの所にては、武辺（武術）七分・学問三分にて、文武両翼の如しと申しかぬれば、自今もっぱら学問を遊ばされ、文武五分五分というまでに至らせ給うべし」と言い、「治乱興亡を学ばれよ」と諭したように、若い慶喜は武芸に熱中している。

しかし『一橋徳川家記』での慶喜の武術稽古の記録は、文久二年、二十六歳の時の「書院番・櫛淵太左衛門に剣術・薙刀の師範を命ず」で終わっている。二ヶ月後には将軍後見職に就任し、翌文久三年には上洛して身辺多忙になったためである。最後の将軍・徳川慶喜が、将軍学としての柳生新陰流から何を学んだかは興味あるところである。

岩倉具視に「果断にして勇決、志は小ならず。軽視すべからざる勁敵」と恐れられ、木戸孝允に「一橋の胆略は侮れない。彼に先手を取られれば家康が再生するのを見なければならない」と警戒された十五代将軍・慶喜であったが、鳥羽伏見の戦いで敗れて逃げ帰ったことで分かるように、一時の攻めに強く、粘りや守りに弱かった慶喜が、柳生新陰流の極意である「懸待表裏」を体得していたとは思われない。二百年の泰平の中で柳生新陰流自身が歴史的使命を終えていたのであった。

それは柳生藩自身の運命でもあった。もともと柳生藩は水戸藩と同じように定府であったため、江戸と国元に分かれて対立していた。そこに佐幕と尊王の対立が加わった。

江戸詰めの藩士は将軍家の剣術師範であるという意識が強く、あくまで徳川家と行動を共にすることを主張し、それに対し国侍は京都の情勢にかかるく、近隣の多くの藩が続々と勤皇方に付いていくのをみて、柳生藩も追従しなければ真っ先に攻め込まれるということを理解していた。

京都の新政府は慶喜追討令を出し、諸大名に急ぎ上洛して恭順の意を表するように命令を下した。柳生藩主・俊益はともかく入京しようと江戸詰め藩士を連れて上洛した。国家老の小山田三郎助は京都に着いた江戸詰藩士を口実を設けて一人ずつ国元に呼び出し捕縛した。

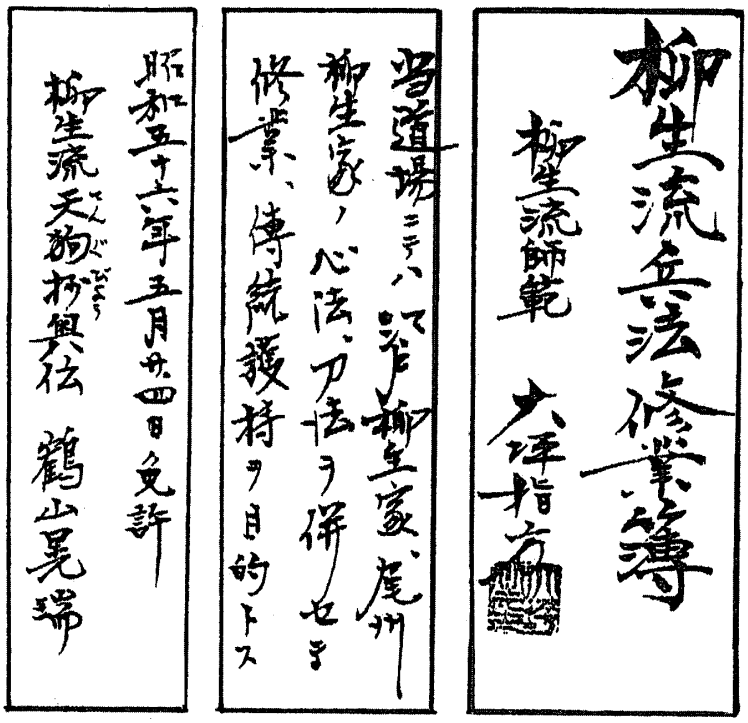
不審を抱いた江戸家老の広瀬小大夫が国元に引き返し柳生の里の入り口の茶屋まで来ると、十数人の国元藩士に取り囲まれて捕えられた。この後、広瀬親子をはじめ数名が藩主の名で切腹させられ、九名の江戸詰め藩士が落命した。こうして江戸柳生は歴史の表面からは消えていった。

しかし江戸柳生家だけでなく、宗矩・十兵衛直伝の柳生新陰流を継いでいた村田柳生家や西脇流の木村佐左衛門家が幕末まで続いていた、これらの家が明治以降どうなったのか、そこに伝えられた柳生新陰流がどのようなものであるのか調べる手段は残されていないのであろうか。今後の研究課題の一つとしたい。

三

別に江戸柳生の継承過程を調べる方法として技法から辿っていく方法がある。

大坪先生は柳生の里の芳徳寺の橋本住職を助けて正木坂剣禅道場の建設に尽力してその師範となったが、正木坂道場での剣道高段者への講習や、電報電話公社の合気道部での指導、それに演武会用の相手以外に特定の弟子はとっていなかった。大坪伝の新陰流の承継者育成のために弟子を取ったのは鶴山先生と稲益氏が始めてである。鶴山先生は電電や朝日カルチャーセンター以外に、個人道場として「日新館」を持っていた。鶴山先生が稽古された時の修業簿の序に大坪先生は次のように書かれている。



ここではっきりと江戸柳生、尾張柳生を修業すると語っている。昭和五十六年五月二十四日、大坪先生は鶴山先生に「柳生流天狗抄奥伝免許」を授けている。

江戸柳生の刀法を知るためには、大坪先生が、これが江戸柳生の刀法であると言った以外にも、大坪伝を尾張柳生の刀法と比較して、尾張柳生とは違った刀法があれば、一応それが江戸柳生の刀法であると推測出来る。明治以降の尾張柳生の刀法を知るには厳周師の書いたものがあれば一番よいのであるが、それがあるという話は聞かない。刀法について延春氏の書かれたものは、筆者は「三学円の太刀」と「燕飛の太刀」の演武写真付きの「新陰流勢法　解説＝柳生延春」のパンフレット、清水博『生命知としての場の論理』（中公新書）中の、柳生会の、「永田氏が書かれ、それに柳生先生が目を通され、加筆訂正された」『柳生新陰流の術と理』にある「三学円の太刀」の型の刀法と解説、および剣道雑誌等に記載された断片的なものしか持ち合わせていない。しかし日本武道館発行のビデオがある。

それ以外に厳周・厳長両宗家に学んだ尾張柳生の高弟・渡辺忠敏の『新陰流第二十世柳生厳長伝述　増補改訂新陰流兵法太刀伝』（渡辺忠敏編集　渡辺忠成増訂、昭和四十四年）、『柳生流兵法口伝聞書』（渡辺忠敏著、昭和四十九年）また忠敏氏のご子息で転会を主宰しておられる忠成師範の『新陰流入門』（渡辺忠成著、昭和五十四年）とそのビデオがある。それぞれ『延春伝ビデオ』『厳長伝述』『厳長口伝』『入門』『入門ビデオ』と略称させていただく。さらに『新陰流兵法教範』（渡辺忠成・島正紀共著、平成十一年）があるが、同書は転会内部の教典の形をとっているので参考のみにとどめた。

著者は大坪伝柳生新陰流の歴史および「刀法」、「心法」を十数年に渡り研究し、それとあわせて刀法の技術・理論の直伝指導も受け現在に至っている。これらを通じて会得したことと、さらに『大坪伝柳生新陰流相伝ビ

デオ』をもとに、大坪伝と他の伝とを比較検討することで、江戸柳生の本質にすこしでも迫ってみたい。

最初に言っておきたいことは、大坪伝と他の伝との違いが大きいということである。大坪先生は「新陰流は体捌きである」と言われている。伝統武術の本質は「間合いと残心」であるが、大坪伝は「間合いと残心」を「気合や位」ではなく具体的に体捌きで示している。

大東流や合気道の源流には江戸柳生があると云われているが、こうした点からも大坪伝は江戸柳生をもとにしていると思わざるを得ない。

「体捌き」とは、先ず相手の攻撃を避ける位置に身体を移動させることが必要条件である。しかしそれだけでは十分ではなく、その避けた位置が確実に相手を制御することが出来る間合いであることが絶対条件である。

したがって、この場合の「間合い」とは単に相手との空間的な距離だけではなく、冷静に相手に応じることが出来る時間的間合いも含んでいる。そのためには「体捌き」と「間合い」は、いずれも「残心」の心持が必須である。

以上の体捌きを身につけることによって、相手の攻撃を受けることで、かえって自分が絶対的に有利な間合いを取ることが出来るのであり、他の多くの武術や現代剣道のように、相手の攻撃を防ぐのではなく、かえって相手の攻撃を喜んで迎えることが新陰流の特徴である。

それでは具体的に刀法の違いをみてみよう。もとより他の伝が大坪伝と違っているからといって、それらが大坪伝より劣っているというつもりは全くない。ただ、違いを際立たせるだけでなく、大坪伝からみた場合の著者なりの他の伝に対する疑問点も指摘したい。出来れば他の伝の師範の先生方に、著者の疑問点に対する説明をいただければ幸いである。

柳生新陰流の太刀勢法（型）の主なものは、江戸柳生の祖・柳生宗矩の『兵法家伝書』によれば次のようになる。

三学円の太刀

一刀両段　斬釘截鉄　半開半向　右旋左転　長短一味

九箇の太刀

必勝　逆風　十太刀　和卜　捷径　小詰　大詰　八重垣　村雲

天狗抄

花車　明身　善待　手引　乱剣　序　破　急

大坪先生はこのうち「三学円の太刀」と「九箇の太刀」を特に重要視されている。「三学円の太刀」は上泉信綱が編み出した太刀で、新陰流の極意の一切がこの五本の太刀にあるといわれる。「九箇の太刀」は諸流の極意を究めた上泉信綱がその中から九箇の太刀を選び改変して新陰流の太刀としたものである。

大坪先生は、待の型である「三学円の太刀」が新陰流の表であり、懸の型である「九箇の太刀」がその裏であり、「天狗抄」以下はその応用問題であるので、新陰流を学ぶには「三学円の太刀」と「九箇の太刀」を十分に稽古せよと話されている。また「三学円の太刀」と「九箇の太刀」の真髄が分からなければ、それ以上の太刀を学んでも意味がないと言われている。この二つを重視した大坪先生は、自らの教習の中心に「柳生直伝懸待の位」を置いている。

著者の推測であるが、大坪先生は、刀を持って実際に斬り合うわけではない現代、新陰流の刀法も哲学も「三学円の太刀」と「九箇の太刀」の二つに学ぶべきすべてが込められており、それを学んだ後は新陰流の哲学を実際の生活の場でそれぞれが生かすことが大切であると考えられていたように思われる。

しかし「九箇の太刀」は、もともとは上泉信綱が諸流の極意を集めたものであり、信綱の独創になる「三学円の太刀」が新陰流の真髄である。

「三学円の太刀」は、懸かってくる「敵に随って転変」して勝つ「待の位」の太刀であるが、そのためには敵に対して身構えをしっかりしておかなければならないとして、柳生宗厳は「五ケの習い」を創設している。慶長六年（一六〇一）の金春七郎に宛てた「新陰流兵法目録事」では「身懸五箇事」として次の五つを挙げている

第一　身を一重になすべき事
第二　敵の拳を我が肩にくらぶべき事
第三　身を沈にして我が拳を下げざる事
第四　身をかかり先の膝に身をもたせ後のえびらを開く事
第五　我が左の肘をかがめざる事。

この身作りは第三に「身を沈にして」とあるように甲冑を身に着けたときの構えであり、後に宗矩や利厳によって改変されることになる。

次にそれぞれの勢法（型）について検討するまえに、「三学円の太刀」の最初の「一刀両段」で使太刀が構える「車の構え」について述べておきたい。新陰流の考え方が最もよく現れているからである。

左足を敵に真っ直ぐに向け、右足を左足と直角に（撞木）大きく引き、体は半身となって右を向き（身一つの構え）、顔は正面を向き、太刀は左半身になった体の前に刃を下向きに自然に提げる。体からも構えからも敵を威圧するものは何もない。ただ二つの眼が静かに敵を見ているだけである。

新陰流の最初に位置づけられるこの構えを江戸柳生四代・宗在の高弟の佐野嘉内『新秘抄』（一七一六年）では「沈龍の構え」と呼んでいる。

この太刀を名づけて沈龍の太刀とも云べき、下段にしずめる形は、竜の水底に蟠りて居るがごとし。この故に沈みてかまえ、太刀を臍（ほぞ）にあつるが如く持って、敵の働きを待て打出すなり。

この構えは水中でじっと息を潜めている龍に似ている。この龍は機を見るや、突然、水の中から飛び出して敵に襲いかかるのである。

身近くまで迫った打太刀めがけて、使太刀は車の車輪のように円を描いて太刀を振り上げ振り下ろす。遅れて振り出された使太刀が打太刀にノッて勝つのは、「車の太刀」と同時に、左の足をそのまま「沈龍」の勢いで前に踏み出し、太刀と体が一つになって打太刀にノルからである。しかもその時、左の肩は後ろに引かれているので、打太刀は僅かに目標を見失ってしまうのである。

『兵法家伝書』には「左の肩をきらせて、きるに随って、まわりて勝つなり」とあり、『新秘抄』には「この構え下段にして、車の太刀なり。巡り打たん為に、弓手（左手）の肩をさし向けて、敵より肩を切るとき、車に打ちこめば、身の捻（ひね）りにつれて、肩はおのずから外れ、二星（敵の拳）を勝つなり」とある。

敵を打つための転身が同時に敵の太刀から身を翻す転身となっている。柳生の太刀に受太刀はない、「当たる、払う、流す」の三つであるといわれ

る所以(ゆえん)である。

しかもその太刀は左足前のまま振り出されるので腰が充分に入っておらず止(とど)めの太刀としては弱い。相手の手を斬って戦闘能力を失わせるだけで相手に致命傷は与えないのである。柳生の太刀が活人剣であると云われる所以である。また、対多人数に応ずる刀勢にもなっている。

ちなみに著者の主宰する柳生新陰流稽古会は「沈龍の会」という。

これまで江戸柳生について、「江戸柳生の場合は石舟斎までのものを一切変革せず、幕末まで開祖からの古典を墨守」してきたという理解がなされている。それに対して石舟斎から一国一人の印可を受けて尾張柳生の祖となった利厳は、石舟斎の重い甲冑を身にまとった甲冑剣術的な「沈なる身」を否定して素肌剣術的な「直立たる身」を創始して、剣術に一大変革を成し遂げえたという。

しかし戦国時代の、合戦で使う「殺人剣」を否定して泰平の世の「活人剣」を創始しようとした宗矩が、合戦で使う甲冑剣法を墨守したなどと考えることは出来ない。

「元和偃武」以降は「合戦はない」という前提があり、将軍や大名は戦場ではなく城の中で生活するのである。重い甲冑を着なければ、腰が伸びて「沈なる身」作りから開放されることが自然である。

尾張柳生の祖・利厳は慶安二年（一六四九）の『始終不捨書』で「身の懸かり五箇を昔の教えの如く前にて作るは悪し。身堅まる故なり。今は前を豊かにして敵に逢て勝口のとき五箇の心持ち好し」として、「沈なる身」を否定する。しかしそれより三十年も前の元和四年（一六一八）、柳生宗矩は『見の巻』で既に、石舟斎の「身を沈にして」を「五ケの習い」から削除している。それは寛永九年（一六三二）の『兵法家伝書』にも受け継がれている。加藤純一は『兵法家伝書に学ぶ』（日本武道館、平成十五年）で次のように指摘している。

これはある意味で、宗厳の頃の甲冑を装着した剣術からの脱皮と捉えることが出来る。つまり、柳生宗矩が、尾張柳生の兵法によって確立された新しい身作り（直立たる身位）より前に、脱甲冑化という時代に即した新たな身作り、新たな身体技法を模索し、打ち出していた可能性があるということである。（五三頁）。

ただし江戸柳生においては、重い甲冑をまとった際の「沈なる身」は否定しても、利厳のように「直立たる身」になったわけではない。「直立たる身」になってしまえば、それ以降の尾張柳生がそうなっていったように、剣術偏重の新陰流に変ってしまう。宗矩にとって新陰流の極意は最終的には「無刀」でなければならない。「三学円の太刀」も「九箇の太刀」も「無刀取り」の稽古でもあるのである。そして「無刀取り」は、低くした身を、入身と同時に伸ばすことを極意としている。したがって膝の力と肩の力を抜いたことで生じる「沈なる身」まで否定したわけではなのである。

以上の観点から江戸柳生と尾張柳生の「刀法」の違いを見てみよう。

「三学円の太刀」には上泉信綱による本来の勢法以外に尾張柳生の柳生連也が初学者用にそれぞれの型を分解して作った「取り上げ使い」がある。

大坪先生の「取り上げ使い」は明らかに尾張柳生と異なっているので、江戸柳生も「取り上げ使い」を教えていたと思われる。江戸柳生がいつから尾張柳生の「取り上げ使い」を採用したかは不明であるが、幕末に尾張柳生の分家・義質と厳光が江戸柳生の木挽町道場を預かって新陰流を教えたことがあるので、その頃なのか、あるいは下条小三郎が江戸柳生の型に作り変えたのではないかと著者は推測しているが、今後の研究課題である。

「取り上げ使い」は本来の刀法を分解し、太刀を大きく転ずる勢法（型）で、その目的は、初学者には基礎から正しく学ばせること、他流の経験者には、その流派の癖を取り除き、初心に帰らせ、新陰流を正しく学ぶ気持ちにさせることである。そして「三学円の太刀」の「取り上げ使い」の修練を通して次のことを学ぶ。

○「待の太刀」の理合を学ぶ。

「三学円の太刀」は新陰流の極意である「懸待表裏の位」の内、こちらから仕かけず相手の変化に応じて勝つ「待の太刀」であり、「表の位」である。

○勢法における技術（刀法）・理合（間合い、残心、目付）を学ぶ。

○勢法に凝縮内包された教訓（心法）――自分からは仕かけない、ぎりぎりまで待つ、一の太刀で止めを刺さず反省する機会を与える、反省なく再度攻撃を仕掛けてきたら二の太刀で止めを刺す――を学び、それぞれの生き方に役立てる。

この「取り上げ使い」を十分に時間をかけて稽古して、刀勢も定まり、「入身」「転身」の体捌きも出来るようになり、刀法が身について初めて「三学円の太刀」の本来の勢法である「下から使い」の修業に入る。そこで「待の太刀」の実践理合を学び、兵法の教訓を会得する。

「表の位」である「三学円の太刀」に対して「裏の位」があり、それが「懸の太刀」である「九箇の太刀」である。しかし「九箇の太刀」は初めに使太刀から懸かるが、それは誘い（迎え）であり、相手の変化に応じて「二の太刀」で勝つのであるから、その理合の本質は「三学円の太刀」と同じ「待」であり、「三学円の太刀」が完成して始めて修行に入るべきものである。「大坪指方直伝・柳生直傳懸待の位」とは、以上の「三学円の太刀・勢法五本」および「九箇の太刀・勢法九本」のことを言う。この「懸待表裏の位」に対して「天狗抄勢法八本」が加わって『柳生新陰流』が完成する。

まず大坪伝の「取り上げ使い」を見てみよう。（「取り上げ使い」は「九箇の太刀」にもあるが、「三学円の太刀」で十分と思われるので本書では取り扱わない。）

『刀法の説明』は大坪先生の教えを稲益氏が書伝にした『勢法極意書』に、著者が『大坪相伝ビデオ』を見て付け加えたものである。また『考察』は著者の考えである。写真の打太刀は稲益氏、使太刀は著者である。

三学円の太刀（取り上げ使い）

一刀両段（イットウリョウダン）

使太刀　左足を一足長前にして、順勢の車に構える。（身一重の構え）

（足運びは、両足の踵をつけ太刀を前に下げた無形の構えから先に左足を半歩前、次に右足半歩後に運ぶ。それぞれ半歩半歩前後する。この両足間一歩幅で間合は変化しない①。）

剣の刃は下向きとなる。左肩越しに打太刀を見る。

打太刀　中段の構えで太刀先を使太刀の目の間に付けて接近する。（後ろの左足から進める②＝間合いは変化しない）

間合いに入り上段（雷刀）に取り上げる。

使太刀　応じて上段に取り上げる。

（順車の構えになる時と逆の運足となる。立ち上がった時と同じになるが、左足先を右足より親指ほど前に出す。間合いは変化しない。但し親指の長さ分、左足で間合いを盗んでいる。）

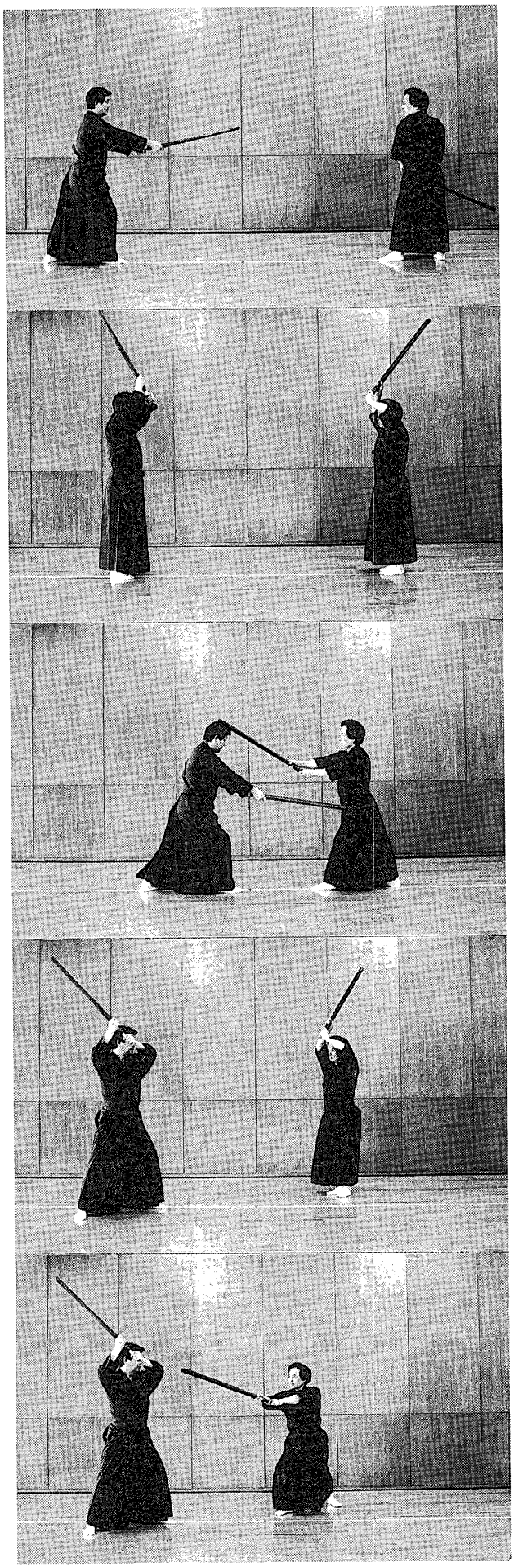
打太刀　右足を踏み込んで頭をめがけ真っ向に斬りかかる。左足は継ぎ足。

使太刀　打太刀の太刀が身に迫るのをギリギリまで待ち③、応じて左足を踏み込み頭を真っ向を斬る④。合打（がっし）⑤により使太刀が打ち勝ち、打太刀の太刀は右に外れる。

（応じる時が早すぎると相手は太刀筋を変えてしまい、遅すぎると撃たれてしまうので、斬られないギリギリまで待つ）

打太刀　右足を右斜後ろへ引いて八相に構える。

使太刀　応じて太刀を上段に取り上げながら後の右足から右斜めに退き両足をそろえ（打太刀に正対する）⑦、八相に構えた打太刀の左肩を、右足から踏み込んで大きく斜めに斬る。



【考察①】立ち上がって使太刀が車に構えるところからすでに問題となる。『**大坪伝**』では立ち上がった時と車に構えた時では間合いは変化しないが、『**厳長伝述**』に「太刀を無形の位に臍下に提げ、右足を一足長程前に踏出し立つやいなや、右足を（大きく・充分に）一歩長真直ぐ後ろへ引き・開く」とあるように、『**大坪伝**』以外はそれぞれ若干の違いはあるが、すべて車に構えると立ち上がった時とくらべて間合いが後ろに変化している。

【考察②】打太刀は『**延春伝ビデオ**』では前に出ている右足から進みだす。後ろ足から進み出すと間合いは変化しないが、前に出ている足から踏み出すと、最初の一歩で間合いが変化してしまう。打太刀は本来、新陰流ではないが、大坪先生は後ろ足から歩を進めることを習慣付けるために、打太刀も後ろ足から歩を進めるように指導している。

【考察③】外見で見るならば振り下ろされた太刀が四十五度を越えた瞬間と思われるが、理論的に云えば、打太刀の足にかかる重心が左足から右足に移動した瞬間である。重心が移動したら、もはや太刀筋は変えられない。

【考察④】『**延春伝**』では『**大坪伝**』と同じように打太刀の頭を打っているが、『**転会**』では打太刀の眼の前に振り下ろされ、手、拳を切っている。同じ尾張伝でこの違いは、如何なる理由によるのか。

【考察⑤】「合撃」「合し」「合し打」と呼称されている理合は『大坪伝』では「合打」と表記される。「合打」は尾張柳生の祖・兵庫助の三男である連也が考案したと言われている。お互いに正面を真直ぐに打ち合っても、使太刀が自分の身体の正中線（人中路）を正しく斬り下ろせば、後から振り下ろした使太刀の太刀が時間差により、打太刀の太刀に乗って勝つというものである。

転会の渡辺忠成師範は次のように言われる。「新陰流の基本は転ですから、本来、直線的な技はあまりなかったはずです。『合し』という技は、一刀流の切り落としだと思います。一刀流の極意技を新陰流に取り入れたのでしょう」（『秘伝』一九九六年十二月号、八十二頁）

たしかに「取り上げ使い」だけを見れば、お互いに上段から切り下ろすので、一刀流の「切り落とし」と同じと思えるが、それでは本来の『一刀両段』の、車の構えから円を描いて打ち上げ打ち下ろす「下から使い」の太刀筋は説明がつかないのではないか。むしろ一刀流の太刀さばきだけで行う「斬り落し」ではなく、体全体を使って打太刀にノッて勝つ理合が「合打」の本質ではないだろうか。

「合打」は尾張柳生のもので江戸にはないと言われるが、合打は新陰流の極意技である「十文字勝ち」――敵の斬りこむ太刀がどのようなものであれ、敵と正対して自分の身体の中心線（人中路）を真直ぐに斬り下ろせば、わが太刀が敵の太刀の上に十文字（直角という意味ではない）に乗り敵の拳を打って勝つ――の特殊な場合（お互いが正面を打つ）であるので、必ずしも尾張に独特なものではない。

江戸柳生の祖・柳生宗矩は『兵法家伝書』で「百様の構えありとも、唯一つに勝つこと、右きわまる所は、手字種利剣、これなり」と言っている。手字種利剣は新陰流の極意であるので隠し言葉であり、柳生十兵衛は、『月の抄』で「十字手裏見」と、本来の文字に戻して「十文字勝ち」を次のように解説している。「十字手

裏見の事・・・敵の太刀打つ処を十字になるを云うなり。・・・十文字にさえ合えば、（敵の太刀は自分に）当たらぬなり。手裏見は手の内なり」

大坪先生は柳生の里の正木坂剣禅道場での剣道の高段者に対する講習会で、柳生新陰流の極意は「合打」である説明されている。

【考察⑥】『**入門ビデオ**』では打太刀は、自分から一歩下がり、それを使太刀が一歩詰めよっている。『**大坪伝**』では打太刀の頭に打ち下ろされた太刀は打太刀が引くまでは動かされない。打太刀は負けを認めたらそのまま太刀を下ろして引き下がらなければならない。使太刀はそれをじっと待つ。しかし打太刀が後ろに引きながら八相に構え直すのは、負けを認めず新たな攻撃を仕掛けようとするからである。それならば使太刀は必殺の「二の太刀」を振り下ろさざるを得ない。ゆっくりと大きく左側頭に使太刀の太刀が振り下ろされる。『**延春伝**』や『**転会**』は残心を「位攻め」で示しているが、『**大坪伝**』では「体捌き」で示すためと思われる。実際の試合以外で位攻めが本当に成り立つかどうかは疑問である。

二の太刀は「寸止め」ではなく斬る感覚である。

【考察⑦】『**入門**』では使太刀「後ろの右足から大きく右斜め後ろへ引き下がりながら、中段の太刀を雷刀に取揚げ、左足を引き集める」とするが、『**大坪伝**』では、打太刀が引いて八相に構えた位置を見定めてから二の太刀を振るえるちょうどよい位置に引くのであり、最初から「大きく」などと決めることはない。間合いを重視する『**大坪伝**』と他の伝の大きな違いである。他の伝では、写真やビデオでも分かるように、後ろに引いた使太刀の位置は打太刀の位置から大きく離れてしまう。そこから二の太刀を振るうと、間が遠すぎて残心として意味をなさないように思える。但し大坪伝から見ればの話であり、何か理由があると思われるので御教示願いたい。大坪伝では大体三十センチメートル以内となる。なぜこの位置に振り下ろすか稲益氏との検討の結果、打ちが外れた場合の連続太刀捌きとして、打太刀が動けば直ちに使太刀は太刀を反して一突きで相手を突くことの出来る距離ではないかという結論を得た。

【大坪談話】

「三学円の太刀」は「待の太刀」で、待って相手の変化に応じて勝つ。これが新陰の本筋。この三学円の太刀を成就すれば、特に一刀両段を成就すれば即座に免許を許すよと老先生（厳周）が云われたことがあります。千遍も万遍も振っても一カ所に剣先がピタリととまれば、それでよろしいんだと。

【考察】通常の稽古では打太刀が師で使太刀が弟子である。合打の練習の際、打太刀は袋竹刀が打ち合わされた瞬間、右手の手のひらの力を抜いて使太刀の太刀が打太刀の頭を撃つことができるように導いていく。その練習を何度も繰り返した後、打太刀が次第に負荷をかけていくに従って、使太刀は合打が身につくようになるのである。しかしこの練習のためには頭に防具をつけなければ本当の稽古はできない。柳生の袋竹刀は折れやすいので剣道の面は使えない。江戸柳生では頭に布団のようなものを付けて稽古したという記録もある。著者は宗矩・十兵衛直伝の新陰流である西脇流の防具を参考に他流試合にも使用可能な防具を考案中である。

江戸時代には意味があった「他流試合禁止」を、今なお古流武術が墨守していることが、古流武術から自由な精神を奪い、形骸化している最大の原因となっている。

斬釘截鉄（ザンテイセッテツ）

使太刀　前の位置からやや右に転じて中段に執る。①

打太刀　同じく前の位置からやや右に転じ、順の中段にて接近し、間に入り上段に取り上げる。

使太刀　応じて打太刀からやや遅れて接近し、間に入り打太刀に応じて上段に執り上げる。

打太刀　右足を踏み込んで使太刀の右腕めがけて斬り込んでくる。

（右手の位置が自分の肩の高さ位でとめる。）

使太刀　応じて左足を真っ直ぐ踏み込んで打太刀の右小手を斬る。すぐさま剣先を打太刀の目の間に付けながら腰を右に切って右足を開く。拳（こぶし）（柄）は打太刀の手を斬るようにして少し下がるが、剣先は目の間に付けたままである。

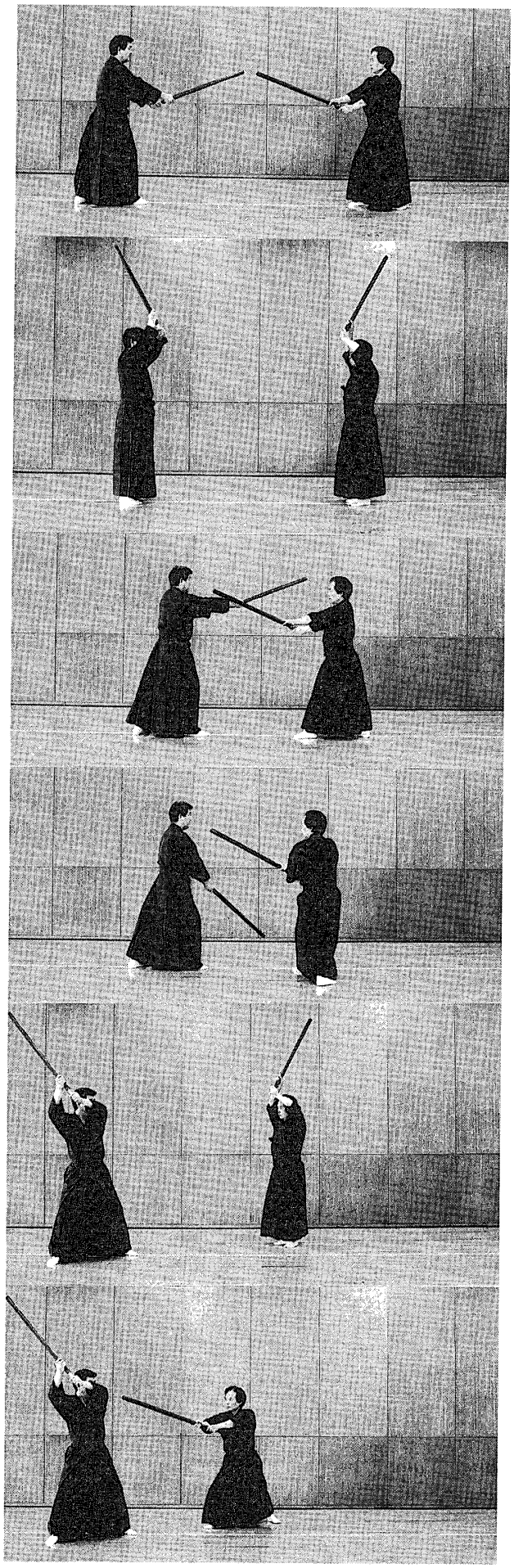
打太刀　右小手を斬られ、太刀を少し下げる。

使太刀　打太刀に正対するように右腰を前に出しながら静かに剣先を打太刀の目の間の方に押し出す。②

打太刀　突き出される剣先を避けるように後方に反りながら、右斜め後ろに右足から大きく引いて八相に構える。

使太刀　打太刀が引くと同時に、右足から右斜め後ろに引いて上段に取り上げ、打太刀が八相に構えたところを、右足を踏み込んで斜めに打太刀の左肩を斬る。

【考察①】『**厳長口伝**』では「使太刀・打太刀ともに真直ぐ中段に構え、互いに先をとり、使太刀は強く先に仕かけそのまま打太刀の吭（のど）へ突込まんとする勢位を示す」とあり、『**入門**』では「使太刀先をとって真直ぐに仕かけ進み、打太刀ののどへ突込む勢いを示す」とあり、共に使太刀から先に仕掛けていく。『**大坪伝**』では三



学円の太刀は「待の太刀」であるので、一の太刀で使太刀が先を取ることはない。打太刀が動くまでじっと待っている。使太刀が先に動くと必ず大坪先生は厳しく注意されている。

【考察②】『大坪伝』は、使太刀は右小手を切った後、剣先を打太刀の眼の間を突くように押し出していくので、堪らず打太刀は後ろに引く。『入門ビデオ』では右小手を斬った後、打太刀が後ろに半歩ほど下がるので、使太刀は位攻めに半歩詰め寄っている。

半開半向（ハンカイハンコウ）

使太刀　前の位置からやや左に転じ、順勢の中段に構える。

（右肩を敵に面して剣先を右に敵に応じることを順勢の構えといい、左足を前に出して構えることを逆勢の構えという）

打太刀　同じく前の位置からやや左に転じ、順の中段にて接近し、間に入ると大きく右（やや斜め前）に踏み込んで上段に取り上げる。①

使太刀　応じて右（やや斜め前）に開いて上段に執り上げる。①

（打太刀、使太刀は互いに正対することになる）

打太刀　真っ向に斬り込んでくる。

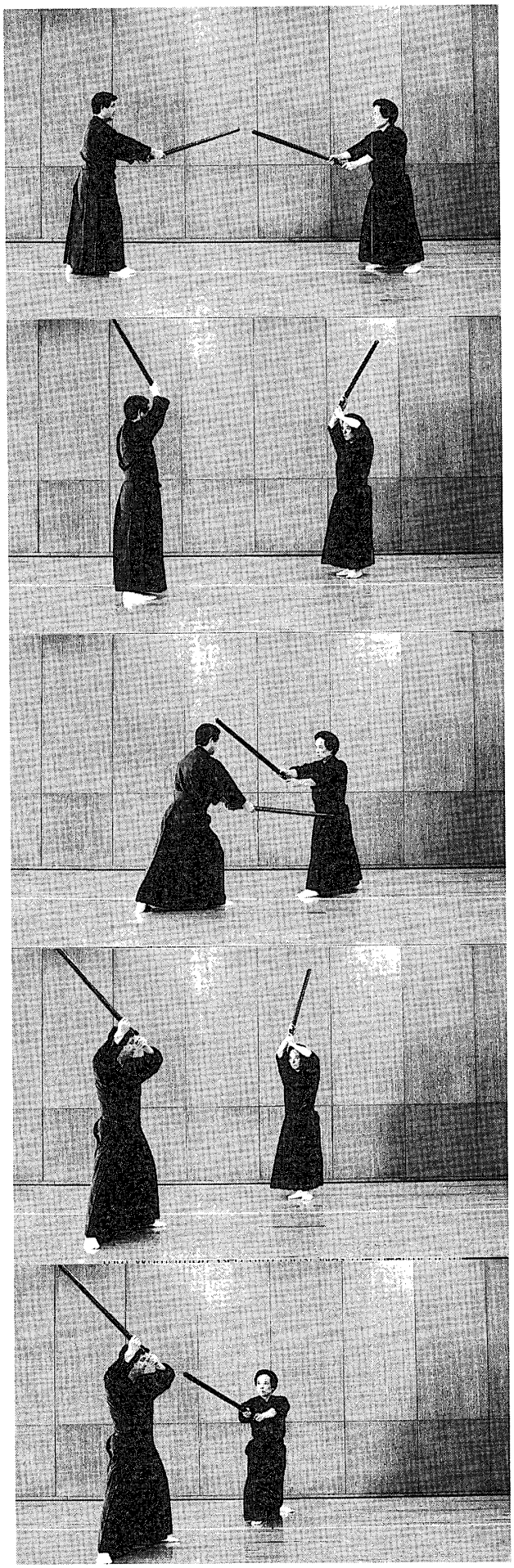
（これからは一刀両断と同じとなる）

使太刀　応じて左足を踏み込んで真っ向を斬る。

打太刀　ゆっくり引いて八相に構える。

使太刀　応じて引き、上段に取り上げ、打太刀が八相に構えたところを斜めに打太刀の左肩を斬る。

【考察①】『入門』では、雷刀に取り上げるとき、打太刀は一足長、右足前、使太刀は一足長、左足前の雷刀、『大坪伝』は両足を揃え、使太刀は、やや左の親指が前に出るだけである。



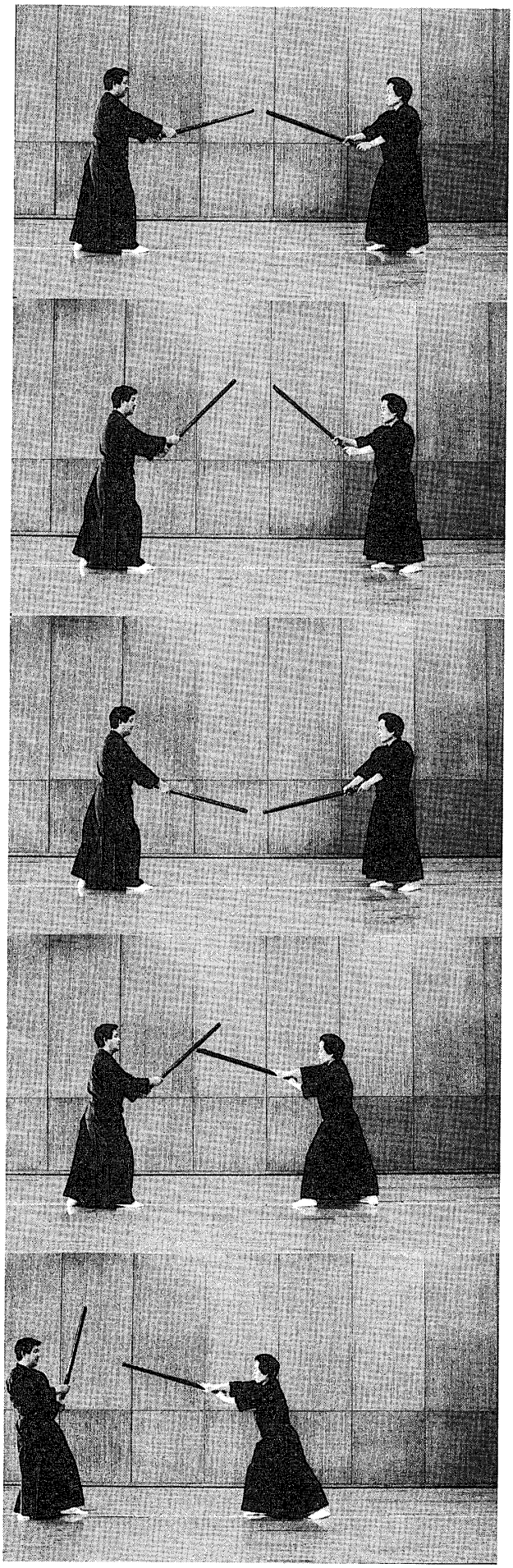
右旋左転（ウセンサテン）

使太刀　前の位置よりやや右に寄り（元の位置になる）、順勢の中段に構える。

打太刀　同じく前の位置からやや右に転じて順勢の中段に構える。十二分にとった間合いから接近し、間境の手前（お互いの剣先の距離はこぶし一つ位）で「刻（きざ）み太刀」①を二本仕掛ける。

使太刀　その刻み太刀に二本応じ、打太刀が三本目を仕掛ける瞬間に剣先を下げて刻み太刀を外すや、左足を踏み込みながら打太刀の太刀の下から、太刀の刃（は）を左上に反しながら潜らせて差し込み打太刀の太刀を制し、さらに後ろの右足を前に進めて打太刀の目の間をめがけて太刀を突き出す。

打太刀　思わず後ろに下がり、太刀を手元に引いて使太刀の剣を避ける。



使太刀　交差した打太刀の剣が離れるやいなや、左に転じて太刀を元の中段勢に戻しながら、打太刀を誘うように二、三歩下がる。

打太刀　使太刀が下がったので、中段で追いかけ間を詰め、間境の手前で刻み立ちを二本仕掛け、上段に取り上げる。

使太刀　刻みに太刀に応じ上段に取り上げる。

打太刀　真っ向に斬りかかる。

使太刀　応じて右に転じて③打太刀の攻撃を外し真っ向に頭を斬る。

【考察①】「刻み太刀」は、「文（あや）太刀」あるいは「文の拍子を切り結ぶ」とも呼び、「刻み太刀を外す」は、「文を欠く」あるいは「拍子を欠く」と同じ意味である。

【考察②】『大坪伝』は目の間を太刀の刃が上に向くくらい太刀を反して剣先を突き込んでいく（ノリ太刀）。『入門』では「使太刀が打太刀を攻める時、急に攻めてはならず、気迫（のどへ突き込む心持）

をもって徐々に攻めるのであって、太刀先が交わってはならない」と言う。ビデオで見た感じでは、かすかに剣先を突き出しているだけであり、とても打太刀が引き下がる必然性は見られない。本の説明の通り、お互いの太刀先も離れたままである。

大坪先生は目の間を全身で突いてこなければ「怖くない、怖くない！」と厳しく注意されている。

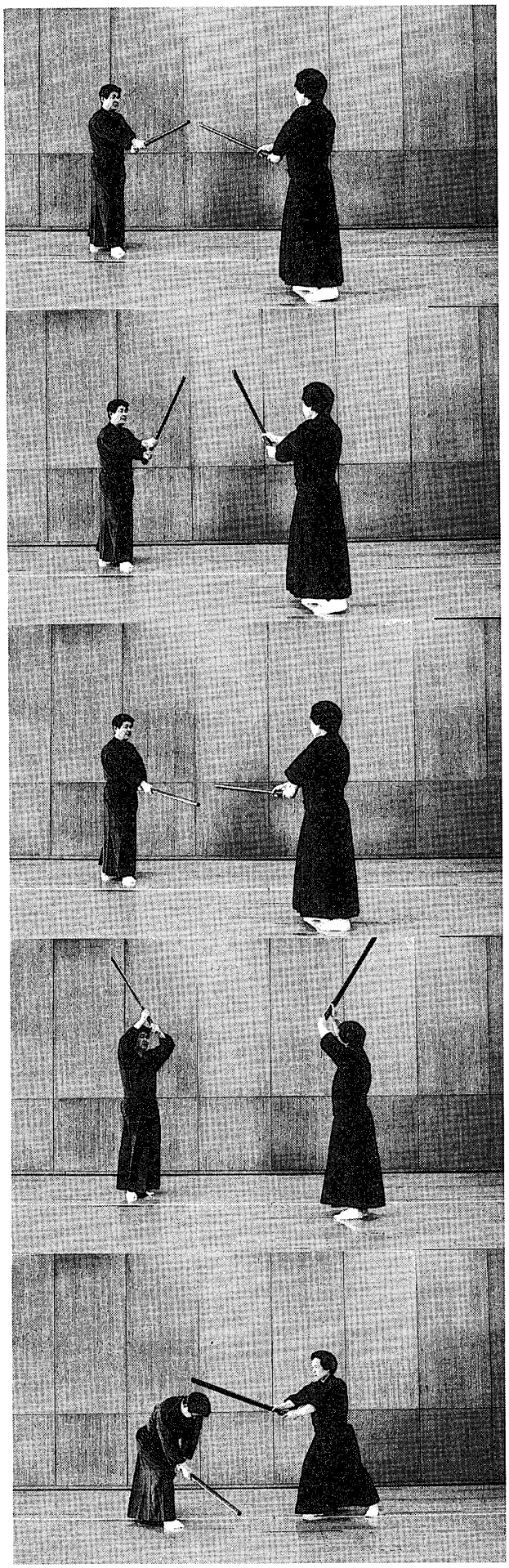
【考察③】『大坪伝』では「抜いて、ノッて勝つ」と言う。

長短一味（チョウタンイチミ）

〔右旋左転〕に続けて使う。

使太刀、打太刀とも元の位置に引き下がる。

使太刀　順勢の中段に構える。



打太刀　同じく順勢の中段に構えて、刻み太刀二本を仕掛ける。

使太刀　その刻み太刀に二本応じ、左足半歩前、右足半歩後になると同時に腰を低くし身一重にて構え、剣先は落とす。

打太刀　足の位置そのままで同じく身一重にて構え、剣先は落とす。①〔打太刀、使太刀互いに睨（にら）み合う〕

使太刀　機を見て上段に取り上げる。

打太刀　それに応じて後の足を半歩進め、前の左足を半歩引きながら上段に取り上げる。

使太刀　右足を踏み込んで真っ向に斬ってくる。

打太刀　応じて左足を踏み込み打太刀の頭を真っ向斬る（ノッて勝つ）②

使太刀　続いて剣先を打太刀の前面に臍（へそ）まで斬り下げ打太刀の剣を制し、剣先を打太刀の腹部に押し出すようにして、打太刀の攻撃をあらかじめ制しながら後ろの右足を引いて下がり、間を十二分にとる

③。構えは最初の身一重になる。

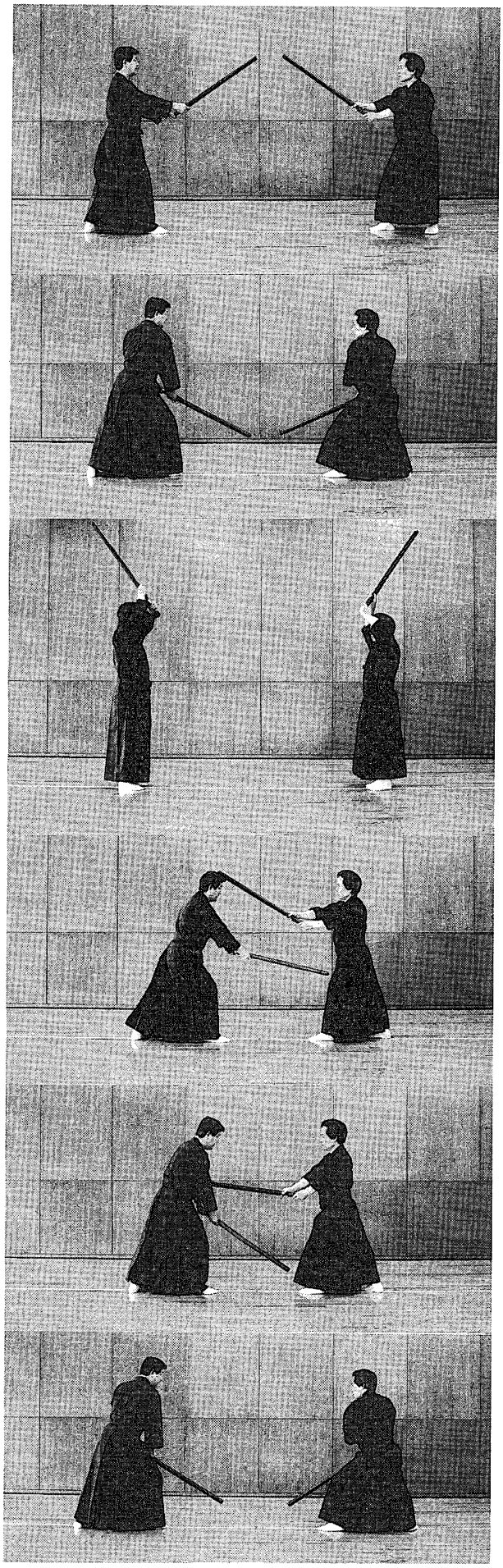
打太刀　元の位置に引く。（構えは最初の身一重）

【考察①】『**入門**』では「使太刀の切り下げる（下段欠く切りの構え）のにつれて青岸の太刀先を一瞬低くし」とあるが、『**大坪伝**』では右足前の身一重の構えになる。

【考察②】『**入門**』では一の太刀は「合し打乗り、太刀先で打太刀の両拳を打抑え」とあり目の前で合撃に打ち合うだけであるが、『**大坪伝**』では「一刀両段」と同じように頭を斬った後、剣先を打太刀の顔の前を通って下ろして両拳を斬り押さえ、引き下がるときには、打太刀が打ってこないように、太刀の先を打太刀の腹につけて押し込みながら、後ろに退がる（残心）。

【考察③】大坪先生は「相手が悪さをしないように」と表現されている。

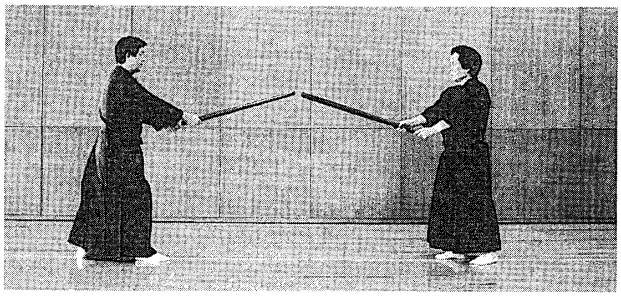
【大坪談話】「長短一味」がやがて無刀取りの基礎になります。



【考察】「長短一味」の、剣先を下げ、下段で太刀を引いて体勢を低くした構えは「入身」動作の基本的な体勢で、「沈龍」の構えの一つであり、「無刀取り」の基礎となっている。

使太刀は太刀を引いて「無刀」に近い状態を取っており、打太刀が太刀を振り上げた瞬間、太刀にても無刀にても真っ向大きく前足を踏み込み（入身）、打太刀の太刀を制するのである。

使太刀は、太刀があっても無くても同じであり、また敵の太刀は役に立たないことを教えている。



三学円の太刀（下から使い）

一刀両段

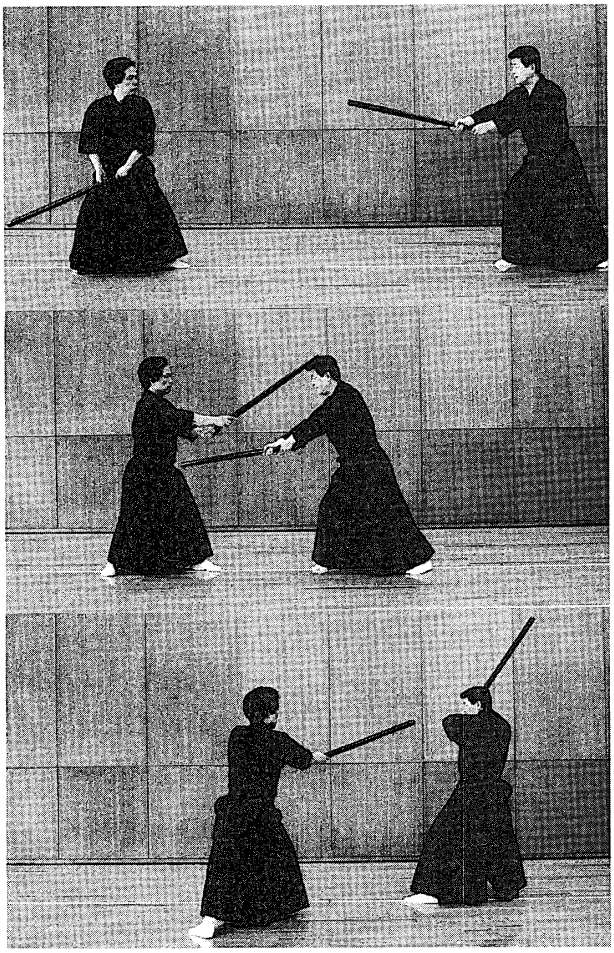
使太刀　順の車に構える。

打太刀　低い中段にて剣先を打太刀の肘（ひじ）に付け接近し、間に入る直前に右足から真っ向めがけて頭に斬り込んでくる。

使太刀　取り上げずに直ぐ左足を踏み込み真っ向に応じ、合打で打ち勝ち頭を斬る。①

打太刀　直ちに引いて八相に構える。

使太刀　太刀を頭に付けたまま残心の心持ちにて、打太刀が引くのを見定めるや、間を取らず直ぐに右足を大きく踏み込み、打太刀の左側頭部をめがけて太刀を大きく廻して斬る。



【大坪談話一】「一刀両段」の「取り上げ使い」は初心者の太刀で「序」にあたり、「下から使い」は本来の太刀で「破」にあたる。「急」は実戦や試合の場合で、宗矩が「当流に構えなし」と言ったように、敵がどのように迫ろうとも「心をもって応じられる位」である。たとえば、

＊敵の接近が近かったら、下から敵の拳を撃ってもいい。

＊敵の迫りが低かったら、真っ向から面に打ちこんでもいい。

＊敵の変化によっては、踏み込んで「十太刀」で勝つ。

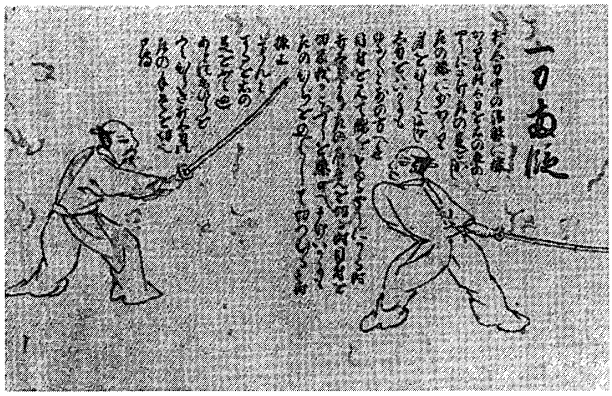
と、試合や実戦では敵の攻撃に臨機応変に応じるのである。

【大坪談話二】「一刀両段」の「合打」にも次のような違いがある。

打太刀が肘に付けて斬ってくるとき使太刀は、

＊上泉伝は、上から面を打つ（ノッて勝つ）。

＊江戸では、腰をきって鍔元近くに擦り下ろすごとくに当たる。



＊古流では、真っ向からをきって太刀付近に擦り下ろすごとくに当たる。

＊名古屋では、真っ向から当る心持ちで面を打ち、直ぐに引いて八相になった打太刀に応じる。

【考察】尾張柳生の古式の型の研究として渡辺忠成編集『新陰流兵法古式勢法之研究』（転会出版部）がある。

斬釘截鉄

使太刀　右に開き（＝前の位置からやや右に転じて）、中段に構える。

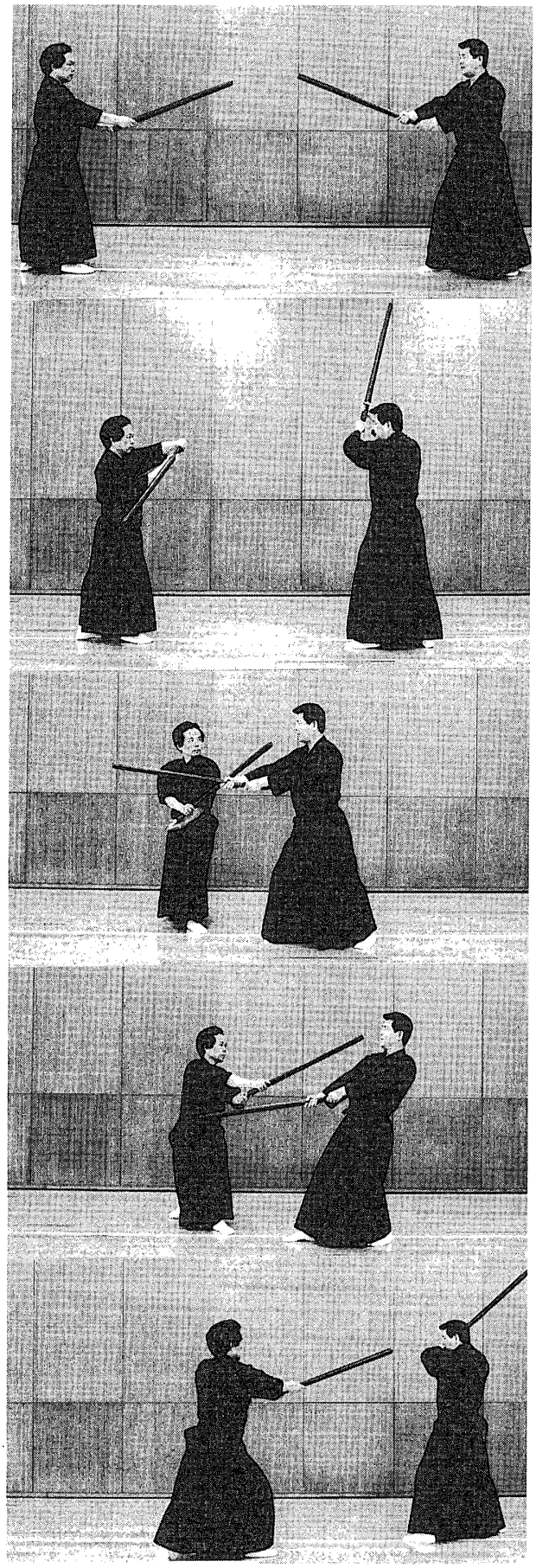
打太刀　同じく右に開き、八相に広く執りながら接近し、使太刀の左側頭部を狙って斬り込んでくる。①

使太刀　剣を右斜めに回しながら打太刀が剣を八相に上げていくのに応じて間を詰め、斬り込んで来る打太刀の太刀が届くか届かぬ間に左足を左前に進めて右を開き、腰を切って逆入身になりながら、廻し太刀にて打太刀の右小手を斬る。②

剣先を打太刀の目の間に付け、腰を打太刀の正面に向け直しながら剣先を打太刀の目の間に突いていく。（**残心**）

打太刀　たまらず後ろに引いて八相に執る。

使太刀　打太刀が八相に構えるや、打太刀につけた剣先を大きく右に回して右足で打太刀を追いかけて横面を切る。



【考察①】使太刀が先に仕掛けることについて、『**延春伝**』では「まず使太刀が先に仕懸けて中段直勢から右足前の順勢の雷刀に上げて、右腕をもって敵を迎える（敵に攻撃目標を与える）。打太刀は、使太刀の右腕を目指して頭の右脇の高い上段から大きく一拍子に打ち懸かる」（「柳生新陰流の術と理」）。『**大坪伝**』では「三学円の太刀」で使太刀が先に仕掛けることはない。

【考察②】ここで『**延春伝**』は、打太刀が一歩退がるので打太刀は正面に向き直り、左足が前のまま左足右足、左足右足と詰めていく。『**厳長口伝**』には「かく身勢を開転したや否や身勢を前向に近く、太刀を真直ぐに近く直おして、太刀先で右こ手を抑さえ、そのまま撞（つき）込まむ勢位を示し、位攻める」とある。大坪先生はそれでは全然怖くないと言われるであろう。

半開半向

使太刀　左に開き（＝前の位置からやや左に転じて）、中段に構える。

打太刀　同じく左に開き、中段にて接近し、使太刀の左拳を狙って斬ってくる。

使太刀　その瞬間、右足を斜め前に踏み出して右に開き、打太刀の斬り込んでくる太刀にノル気持ちで外しながら、左足を右足の前に踏み込んで、太刀を反して（刃が上になるくらい）真っ向、顎の下（のど）を突く。①

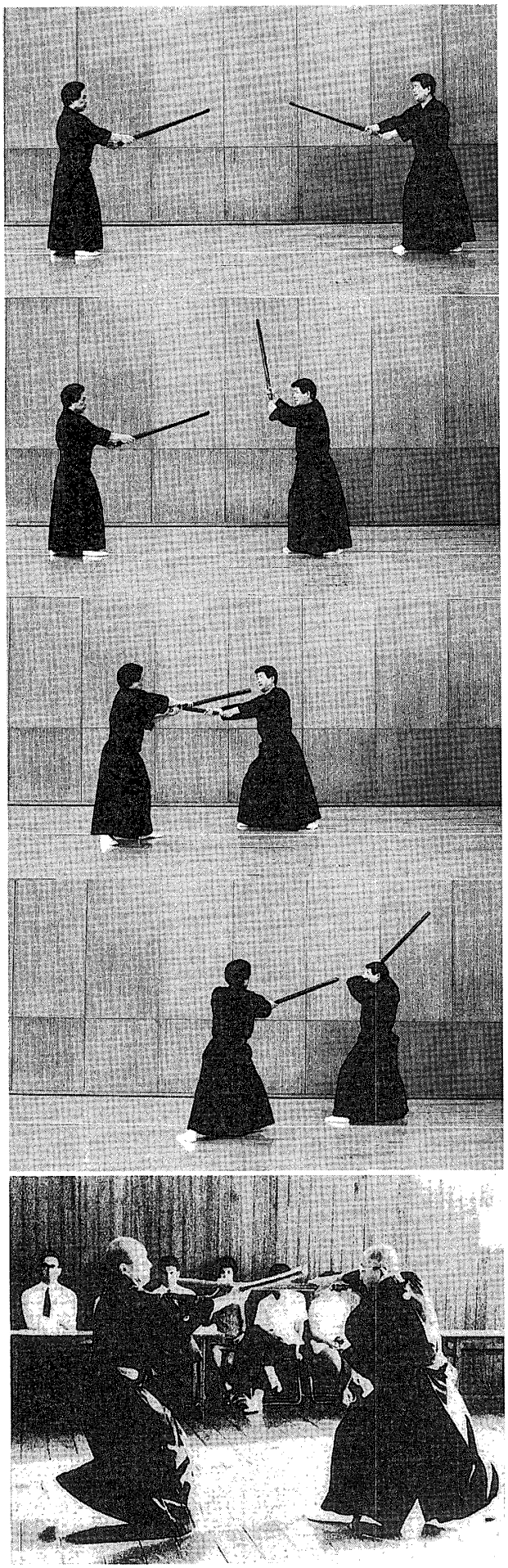
打太刀　直ぐに後ろへ引いて八相に構える。

使太刀　間を入れずについていき、横面を斬る。

【考察①】『**延春伝**』では、使太刀は剣道の突きと同じように右足で前に進んで喉（のど）を突いている。左足は右足につれて僅かに進める。その後、左足を前に出して一歩、位詰め。さらに半歩左足を出して位詰めの後、右足を大きく右前に開いて二の太刀。『**厳長口伝**』は足運びは『**延春伝**』とは若干異なり『**大坪伝**』に近い。しかし『**厳長口伝**』『**延春伝**』共に喉を突いている点は同じである。しかし『**厳長伝**』は喉を突かないで打太刀の柄中に乗って両拳を抑える。『**兵法教範**』では、『厳長伝』は天狗抄奥から教習する「内伝1」であるとして、「下から使い」は喉を突く型を載せている。

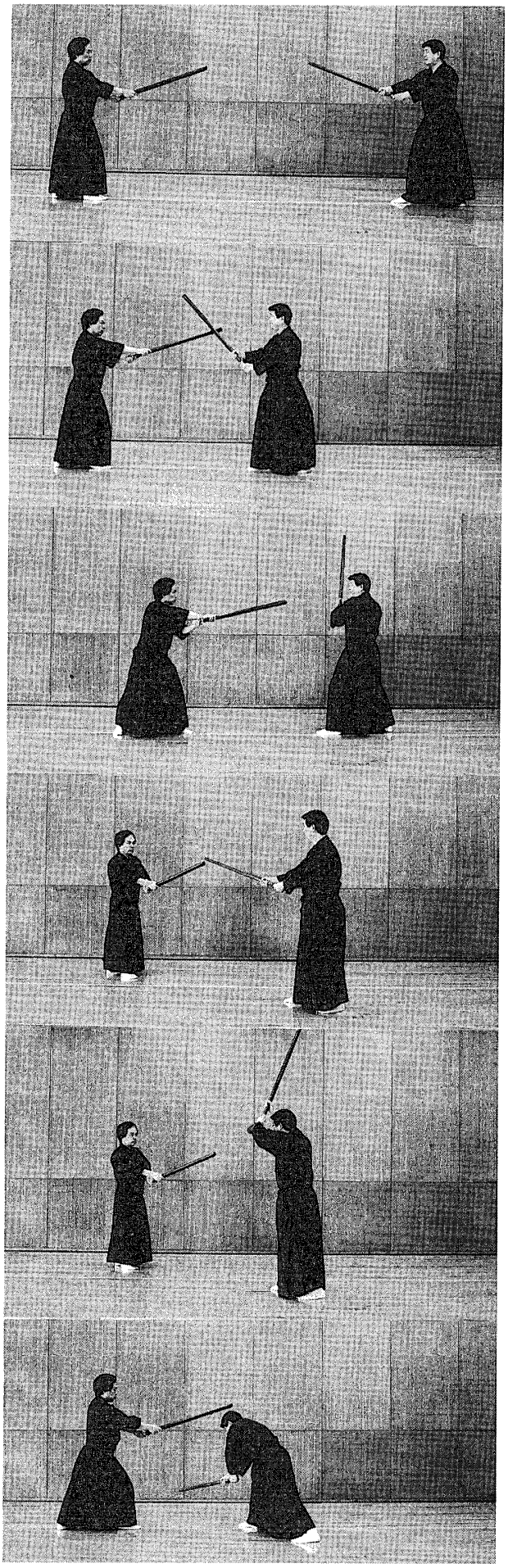
佐野嘉内『新秘抄』

半開半向は、半分ひらき、なかば向うと云うことなり。立向うより、敵の右手へ仕懸けて、右手の足に吾が右足をくらぶれば、半分開きて半身向うなり。さてささえたる太刀さき三寸へ太刀をつくるとき、拳を見込みて敵より打込むとき、敵の弓手（左手）へ両足をはこべば、打ちはおのずから外れて、半身向い半分ひらきて、二星（両拳）を勝つなり。



右旋左転

使太刀　右に開き（＝前の位置からやや右に転じ）、順の中段に構える。
打太刀　同じく右に開き、中段から接近し、間に入る前で刻み太刀を二本仕掛ける。
使太刀　それに応じ（二本目に）ノリ太刀にて打太刀に迫る。①
打太刀　その瞬間、ススッと引く。
使太刀　打太刀の引きばなを外して②、左へ逸れて下がり中段に構える。
打太刀　直ぐに迫っていき、間に入る手前で中段に構える。
打太刀、使太刀とも順の中段にて睨み合い、刻み太刀二本。
打太刀　刻み太刀を外して（二本目に）真っ向を斬ってくる。
使太刀　応じて（二本目に）右に開いて外し、真っ向を斬る。
（抜いて、ノッて勝つ）



【考察①】「右旋左転」も『**大坪伝**』と他伝の型は異なる。『**大坪伝**』は使太刀は太刀を摺りこむ様に右上に廻しながら刃を上に向け打太刀の太刀に乗って目の間を突いていくが、他の伝では位攻めをするだけであり、『**兵法教範**』に「太刀先が交わるのは急ぎ過ぎ、入り過ぎ」とあるように、打太刀は位攻めにあって退るので、使太刀は打太刀の太刀の間合いには入らない。『**大坪伝**』ではノリ太刀で突いていくので、打太刀の目の前に太刀が迫り、打太刀は堪らずに退がる。入り方が中途半端であると大坪先生は「怖くない、怖くない！」と厳しく注意されている。誰でもが思わず退がってしまうような体捌きをするところが、大坪伝の特徴であり、また江戸柳生の特徴ではないか。

【考察②】『**兵法教範**』では「使太刀＝右、左、右と位攻めして場の左側後隅に詰め、次いで左足より小さく引いて、左後方に斜めに引き下

がり、打太刀を誘引するように徐々に順勢の青岸に転じ」とし、「押し詰めてから引きずりこむような気迫がほしい」と言うが、位詰められた打太刀は使太刀が気迫をもって退がったら追いかけはしないであろう。

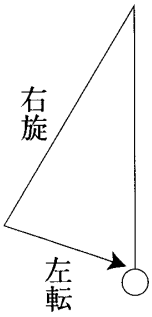
『大坪伝』では、打太刀は使太刀に「ノリ太刀」で迫られ、退がらざるをえない。そこで素早く退がって使太刀の「ノリ太刀」を外す。使太刀は深追いせず、「ノリ太刀」が外れた瞬間、打太刀にすかさず攻撃されないように「旋転」（右旋――打太刀から見た場合）して打太刀の気勢を外す。

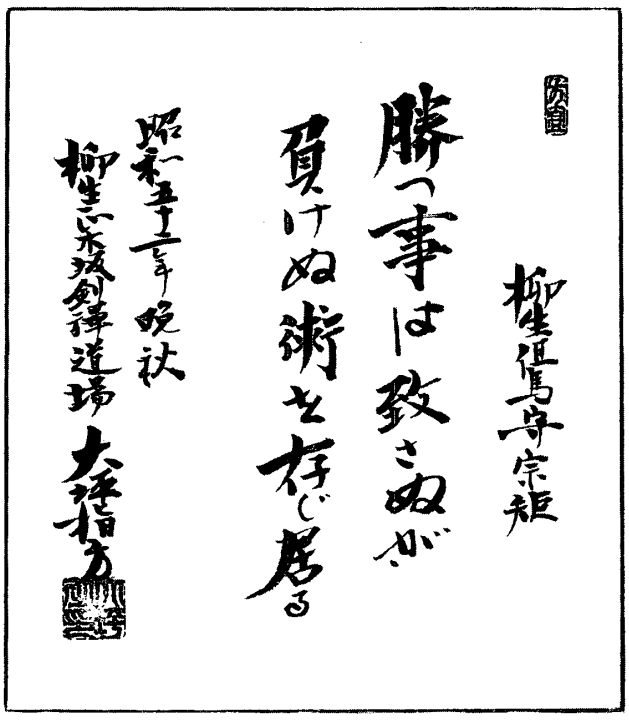
そこで打太刀は「しめた」とばかり追いかけるように右転して間合いを詰める。使太刀が止まったので、再度、中段で睨み合い、打太刀は「刻み太刀」を仕掛け、直ちに真っ向から斬ってくる。（打太刀は初めのときに使太刀に先に攻め込まれているので、内心穏やかでなく、初めの轍（てつ）を踏まないように今度は使太刀より先に仕掛ける）。

使太刀は当然、残心の心持ちで応じているので、再度「旋転」（左転）して打太刀の打ちを抜いて外して真っ向を斬る。

「右旋左転」にはこの「心の読みあい」「駆け引き」などの虚実の動作が内包されているのである。なぜ次の「長短一味」と続けて使われるのかは説明がないが、私見によれば、「右旋左転」により始まった「表裏」のドラマが、中断されることなく、引き続いて演じられるのである。

使太刀の足運び





長短一味

（右旋左転から続けて遣う）

使太刀、打太刀とも元の位置に引き、中段に構えて刻み太刀二本。

使太刀　刻み太刀を外し（一本半）、左足前の身一重の構えになる。

打太刀　つられて少し斬り下げ、その瞬間、真っ向に斬ってくる。

使太刀　それに応じ真っ向を斬る。（ノッて勝つ）

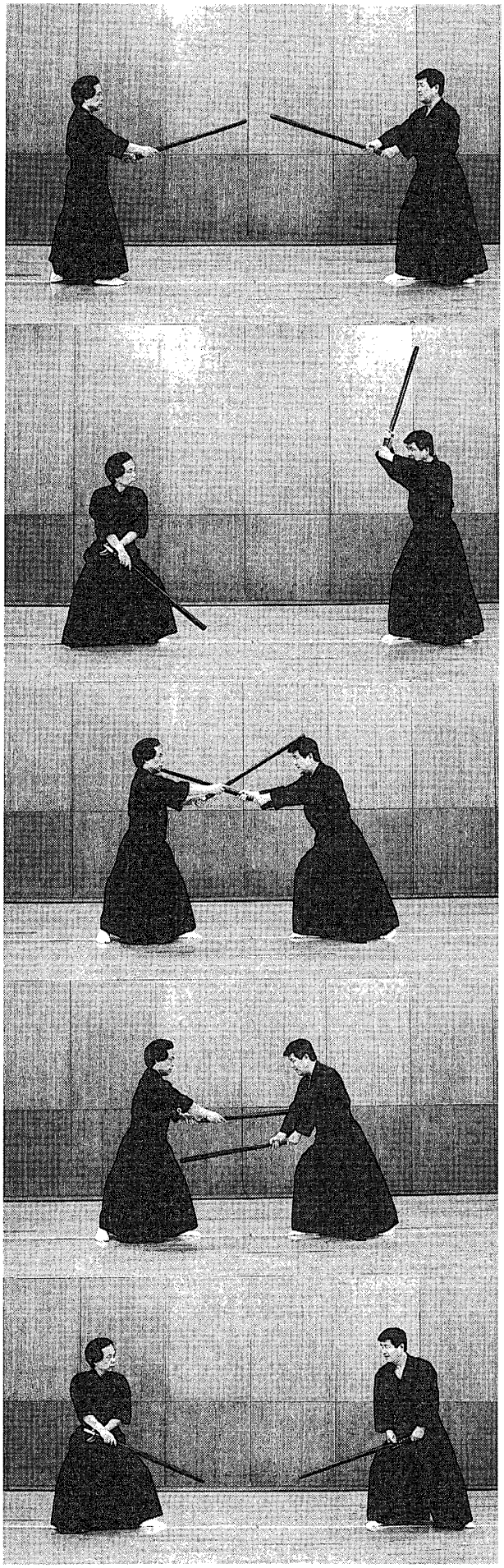
直ぐ剣先を下ろして打太刀の柄越しに前面（腹部）につけ、突き出すようにして打太刀に一歩でも間を取られないように、後ろの右足を引いて十二分に下がる。（構えは左足前の身一重）①

打太刀　同時に引いて右足前の身一重の構えになる。

【考察①】『**延春伝**』は、合打で打ち勝った後、使太刀は後ろに引きながら打太刀の目の間に剣先を付け残心を示し、そのまま引いているが、『**厳伝述**』では「使太刀　左足を一足長程踏出し、拝(おが)み打ちに合し打載り勝ち、打太刀その儘(ままま)引く時、打太刀の柄中――両拳を打抑え、右足より大きく引いて、下段欠く切りの構えに直り残心する」とあり『**大坪伝**』に近い。ただ打太刀の腹を押さえて退くまではしていない。押しながら退くのが『**大坪伝**』の一つの極意である。

佐野嘉内『新秘抄』

長短一味は、長きも短きも一つのあじわいと云うことなり。互いに計りて序を切れども、切り出さざるとき、拍子を欠きて下段に直(なお)り、太刀を臍の下に持ちて、弓手を肩にさし向けて、射向の肩を切るとき真向きに手いっぱいに打込めば、三尺の太刀は九尺の槍と同じ如くに延びて、二星を勝つなり。沈龍のごとく蟠(わだかま)りたる身を延(の)ぶることを長短の一身と云い、一ツの身を以てのべ縮めて勝つ心持を一味というべき。



九箇（くか）の太刀

必勝（ヒッショウ）

使太刀　左手上で太刀の柄を執り、左足を前にした刀法〝必勝の構え〟をとる。

打太刀　順の中段に右膝と一直線に太刀を構え、剣先を使太刀の左肘（ひじ）につける。

使太刀　身を残して右足を密かに右斜め前に踏み出し、左肩越しに打太刀の左拳（こぶし）を覗（のぞ）く（上体を左に切る）。①と同時に左足を踏み込んで打太刀の左拳を斬る。（迎え）②

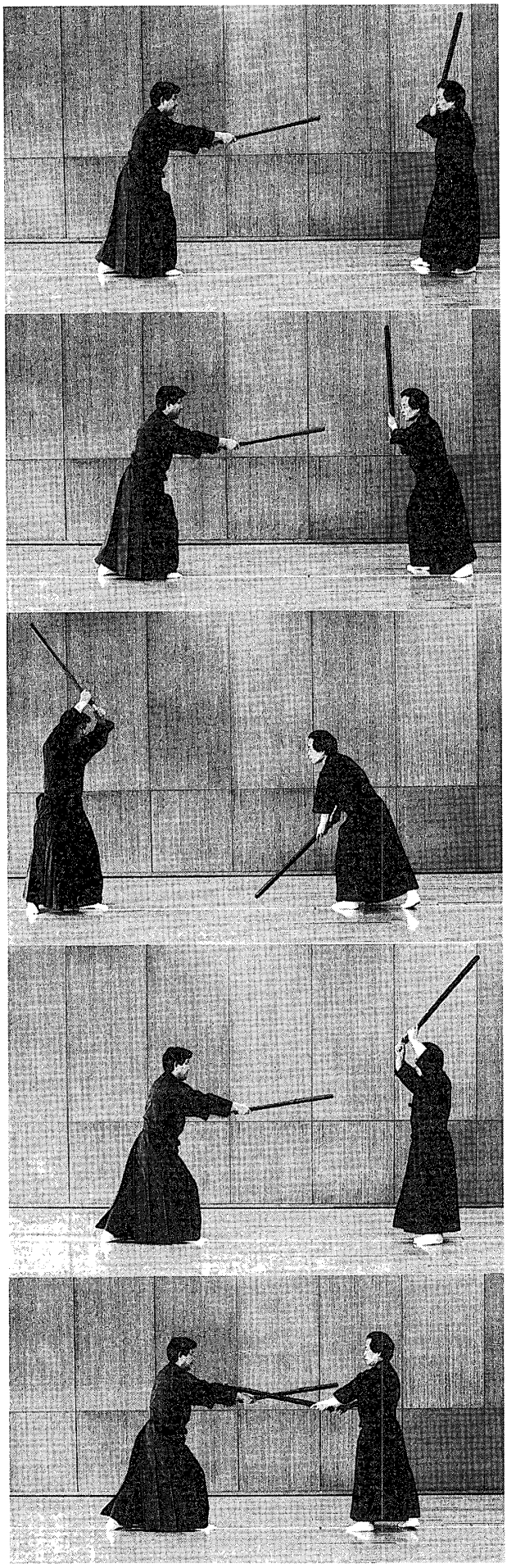
打太刀　すかさず後ろへサッと引いて上段に執り、体勢が緩（ゆる）み、前傾になった使太刀の太刀越しに、右小手を狙って斬る。

使太刀　右足から大きく引いて打太刀の打ちを上段に外すと同時に左足を踏み込んで、打太刀の右小手を斬る。

【考察①】『大坪伝』の特徴は左肩越しに打太刀の左拳を覗く時、右足を密かに右前方に踏み出し、腰を左に切ることで左の肘を急に左に移動させる点にある。打太刀は使太刀の左の肘に剣先を付けていたので（肘についているので使太刀はこのままでは踏み込めない―大坪）、その肘が急に右に動いたため、思わず剣先を右に移動させる。そこで露わになった打太刀の左拳を打つのである。新陰流は体捌きであるとする『大坪伝』の面目（めんぼく）がよく出ている。

他伝は『厳長伝述』に「右足で浅く水月をぬすみ、打太刀の左拳が半露われ居るをよく見る」とあるように、右足の移動によって打太刀の左拳がよく見えるようになるとしているだけで、左肘の移動で打太刀の隙を誘うということはない。

【考察②】懸かりの太刀と言っても、初太刀は「誘い」で、二の太刀で勝つ。



逆風（ギャクフウ）

使太刀　大八相〝柳生の構え〟に構える。①

打太刀　順の中段に右膝と一直線に太刀を構える。

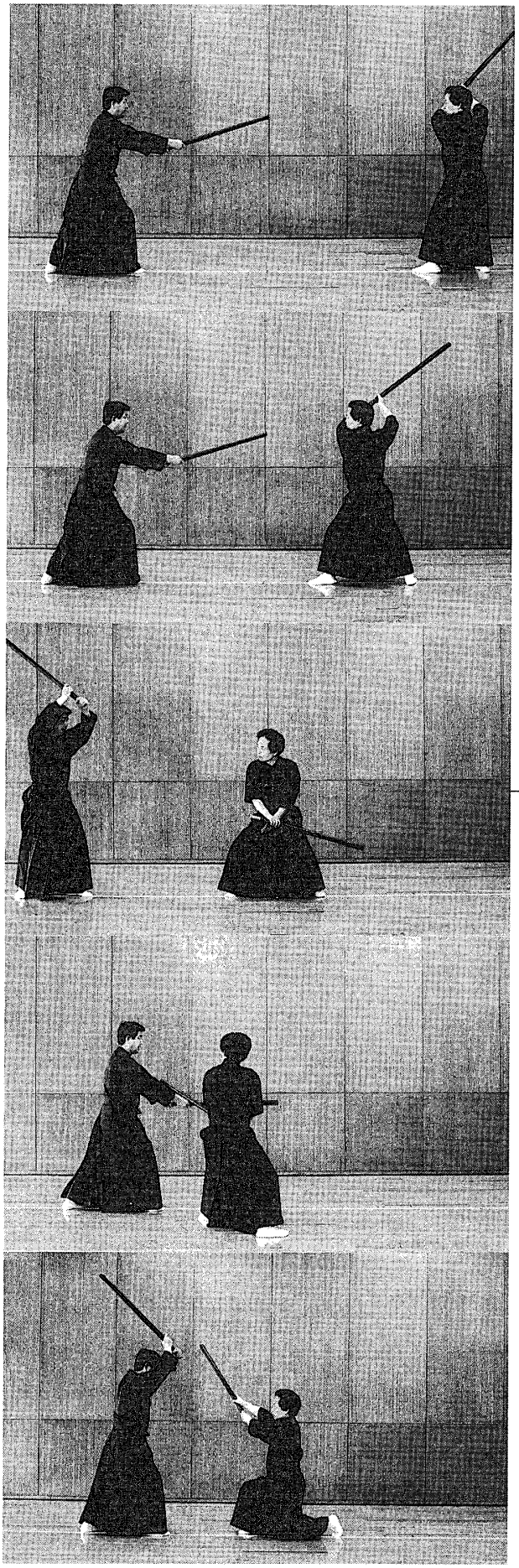
使太刀　左足を打太刀の太刀直下方向に踏み込み、「虚空を斬るが如く」②打太刀の後頭部へ浴びせる気持ちで、思い切って右足を踏み込んで斬り込んでいく。③

打太刀　思い切って大きく後方に下がり上段に構える。

使太刀　思い切った斬り込みが外れて体勢が緩むが、直ぐ太刀を反して腰を低く〝逆勢の車〟に構える。**（迎え）**

打太刀　すかさず大きく踏み込み、使太刀の背中を斬ってくる。

使太刀　それに応じ、左足を左前方に踏み込むと同時に右足を後ろに開き、低い〝逆勢の車〟から、打太刀の出した太刀の右小手を斬る。



（鎧太刀）

【考察①】『**厳長口伝**』では「左足、左偏え身の高い上段ハッソウに立つ」とあるだけであるが、『**大坪伝**』は特に「大八相」として、これは柳生の独特の構えであると言う。

【考察②】これは「極意秘伝」であるが、あえて公開する。

【考察③】『**厳長伝述**』は「使太刀　払いの太刀を実打の要なく、浅く引払（い）打ちして」とあるが、大坪先生は浅く打ちかかると、「怖くない怖くない」と言って使太刀の頭をポンと打たれた。

●**古式の型**「**鎧太刀**」打太刀が使太刀の裏（背中）を斬ってくるのに応じ、打太刀の右脇の下から前首にかけて斬り上げる。

【**大坪談話**】「鎧太刀」で敵の鎧首が吹っ飛んだという言い伝えがあります。他流に類のない太刀で、十万石の松浦静山が一生に一度は見たいものだと随筆に書いる。

十太刀（トウダチ）

（「十太刀」は柳生の秘太刀―大坪）

使太刀、打太刀とも相中段に構え対峙する。

使太刀　刻み太刀を二本仕掛ける。

打太刀　それに応じ刻み太刀を二本入れる。

使太刀　すかさず、右足を右方に進めて開き、刻み太刀を外すと同時にやや左足を進めて左拳を左膝と一直線上に出して見せる（太刀は右方やや後ろ向きに水平に構える）。①（迎え）

打太刀　直ちに使太刀の左小手を斬ってくる。

使太刀　それに応じて、左足を右外方（口伝②）に踏み込んで外すと同時に体全体を使って打太刀の左拳（実打は柄中）を上から斬る。

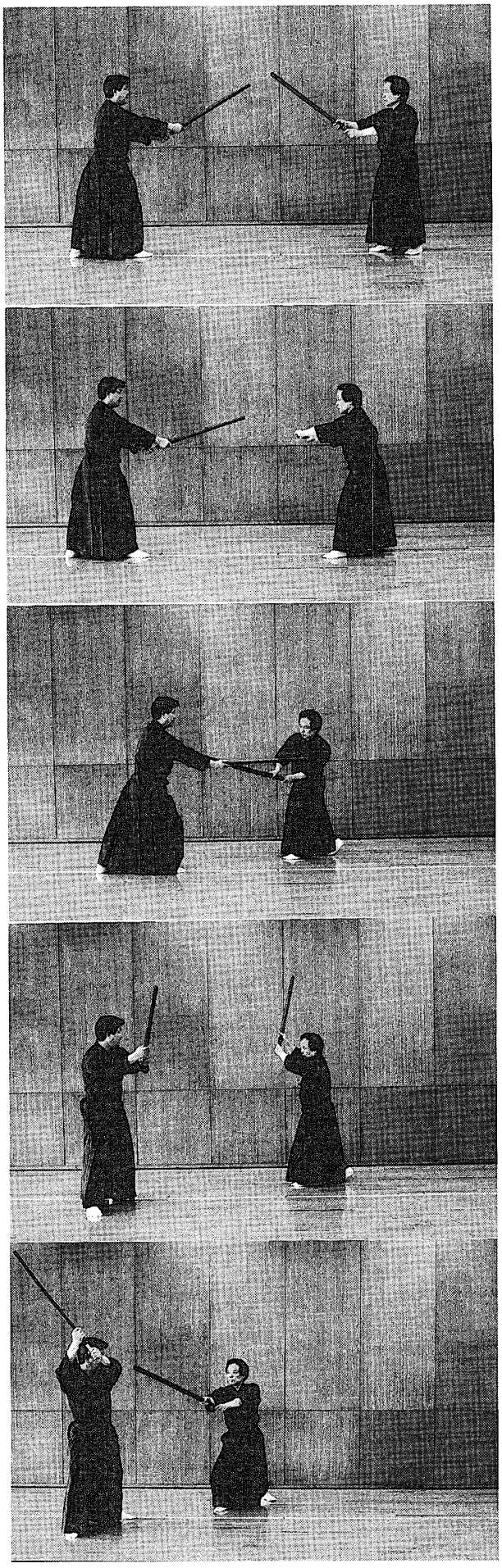
打太刀　引いて八相に構える。

使太刀　応じて直ちに打太刀の側頭部を斜めに斬る。

【考察①】『大坪伝』は太刀を水平に構え、上から太刀を廻して斬るが、『**厳長伝**』では「下段の右わき四十五度」とし「下より斜に打太刀の青岸の左拳・腕を弾上げ幾度も（十太刀という名の由来）打揚げむとす」とあり、それを打太刀が塞ぎ、使太刀の左腕を斬ってきたところを、使太刀は廻し太刀で打太刀の左拳へ打ち被せる。『**延春伝**』では打太刀の左拳を下から何度も打ち上げるだけで上からは打たない。江戸柳生の出渕七兵衛『五巻書』（元禄六年）、佐野嘉内『新秘抄』は『延春伝』に近い。

【考察②】**下条小三郎〝十太刀の口伝〟**

左足を〝左拳から垂直におろした垂線の位置と右足の位置を底辺とした正三角形の頂点〟に踏み込んで外し、体全体を使って太刀を上から斬り下ろす術理。大坪先生は常々、下条先生の十太刀が



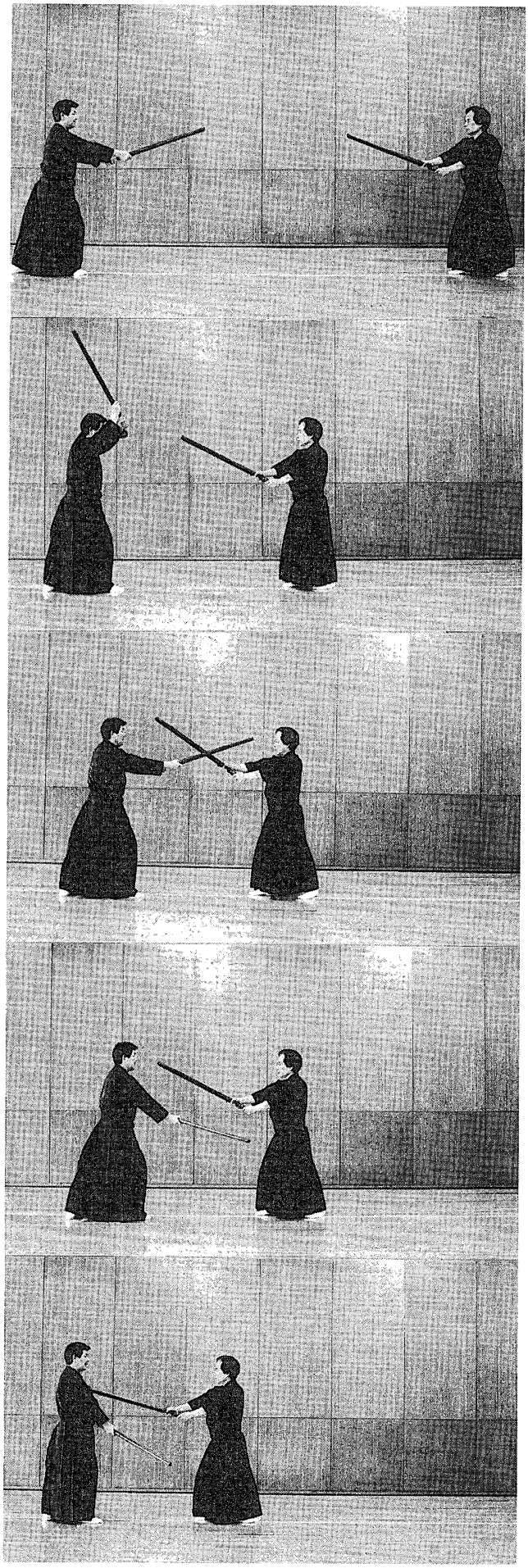
一番怖かったと語っていた。

打太刀は柄中を撃たれるときは、竹刀を握った右拳を広げて指に竹刀が当たるのを防ぐ。

【大坪談話】「名古屋は切っ先だけで斬りますが、これは体全体を使ってきります。太刀が十文字になります」

佐野嘉内『新秘抄』

十太刀は、十文字の太刀と云うことなり。・・・動きは心より発して手にわたり、動き初る物は拳(こぶし)なり。その動きに、吾が太刀を十文字と合することを十字と云うなり。互いに働きを計りて序を切れども、その色にもつかざれば、拍子を欠きて沈龍のごとく沈み、脇構えにして太刀を臍の通りに突出し、拳を見せて敵と吾と十文字に直るなり。その欠く拍子につきて拳を押さえて来るものを、下より八寸（柄）を十文字に勝つなり。



和卜（カボク）

使太刀　順勢の中段に構える。

打太刀　同じく順勢の中段に、太刀を前の右膝と一直線に構える。

使太刀　間境に接近する。

打太刀　使太刀が間境に入った瞬間、すかさず使太刀の左肩を斬ってくる。

使太刀　応じて中段から真っ向に打太刀の太刀を切り落とし、右足で踏み込んで勝ち詰める（剣先は打太刀の喉元に付ける）。

【考察】城中では小刀しか持たない。将軍家の兵法である江戸柳生は小太刀の稽古に力を入れていた。「三学」や「九箇」にも小太刀を使う勢法がある。その小太刀の極意の一つが「和卜」であり、大坪先生は「敵がどう来ようとも真っ直ぐに太刀を斬り下ろして勝つ」と言われた。

押さえ、左腰を左斜め後ろに引いて太刀を腹の前へ落として、剣先を打太刀の右腋口にあて、左足を、打太刀の右足のつま先に乗せて踏み押さえ（左手で執っている柄は下げる）、右手を打太刀の右腋口にあてている剣先近くにあてがう（実戦では脇口から太刀を突き刺す）。

●**古式の型（江戸）**後ろの右足を打太刀の両脚間に踏み込んで倒し突き刺す。

【考察①】『**大坪伝**』では使太刀は身を低くして打太刀に迫っていくが、**他伝**では普通の姿勢で迫り、打太刀の攻撃を誘う素振りはみえない。

【考察②】『**大坪伝**』は体当たりするように踏み込むが、**他伝**は打太刀が間境えで太刀を振り下ろした位置で剣が交差している。「捷径」が「無刀の習い」（新秘抄）であるならば、『大坪伝』がよい。

佐野嘉内『新秘抄』

捷径は、早道（はやみち）と云うことなり。捷はものの疾（はや）きことを云う。径は小路（こみち）

捷径（ショウケイ）

使太刀　順勢の中段に構える。

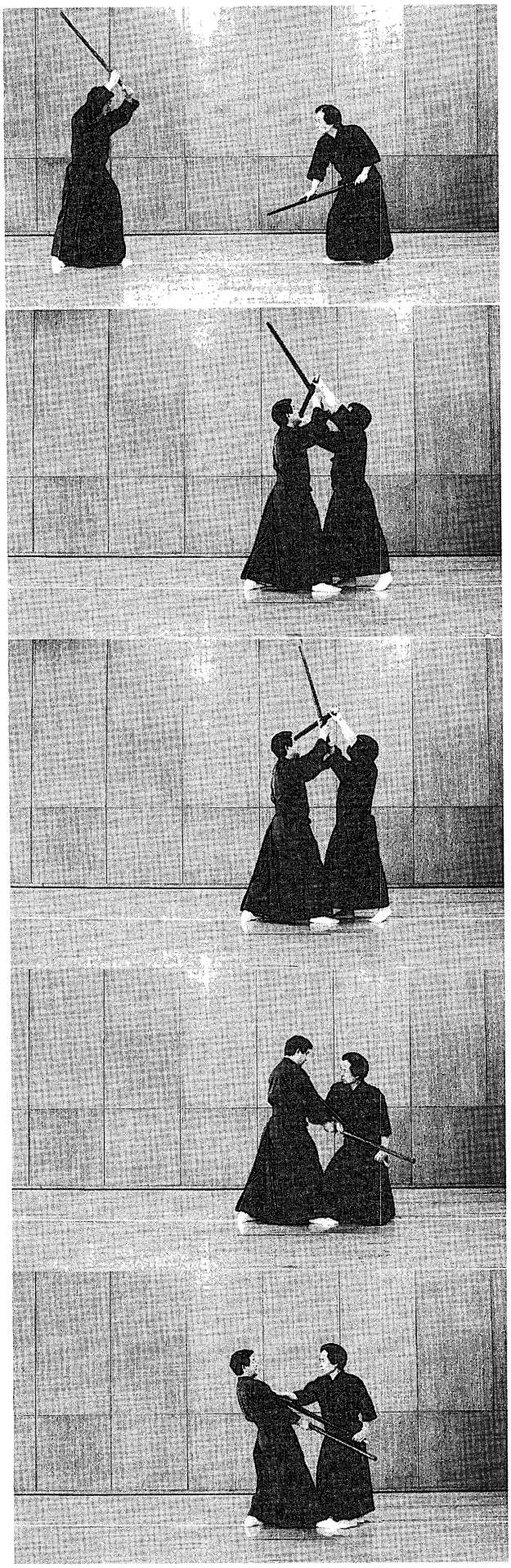
打太刀　十二分にとった間合いで大上段（左足前）に構える。

使太刀　太刀の峰に右手をあてがい（間合いに近づくにしたがって右手を中央付近に移動させる）、身を低くして早足で接近して行き（**迎え**）①、間の手前でとどまる（右足前）。

打太刀　後ろの右足を踏み込み、大上段から斬ってくる。

使太刀　応じて太刀を横にして（刃は上向き）、右足を踏み込んで（ノリ太刀で入身）両腕（左腕を高く、右腕は低く）を差しのべて打太刀の太刀を上方へ跳ね上げる（当ル）。

（打太刀は体勢が崩れ、太刀同士は噛み合って交差している）②直ぐに交差して噛み合っている二つの太刀の交差部を右手で掴（つか）み



と訓じ、敵、小路に取篭(とりこ)もり、上段にかまえて一打にと待つものを、無刀にとる心持を太刀にて稽古するなり。・・・小路に駆け入りて、はやく勝つ心持を捷径と云うべき、無刀の習いにて太刀はもてども、無刀の心になりて白刃(しらは)をつかんで直ぐに取りすくめんと立ち向かうより、水月（間合い）を越しかけて入るなり。無刀は、取らんとばかり思えば喰い違うなり。動く拳に拳を打ち合わする心持にて、ぴかりとすると否に（するや否や）取るなり。

小詰（コヅメ）

使太刀、打太刀とも順勢の中段で、打太刀は太刀を右膝と一直線に構える。

使太刀　静かに順の城郭勢(じょうかくせい)になりながら接近していく。（迎え）

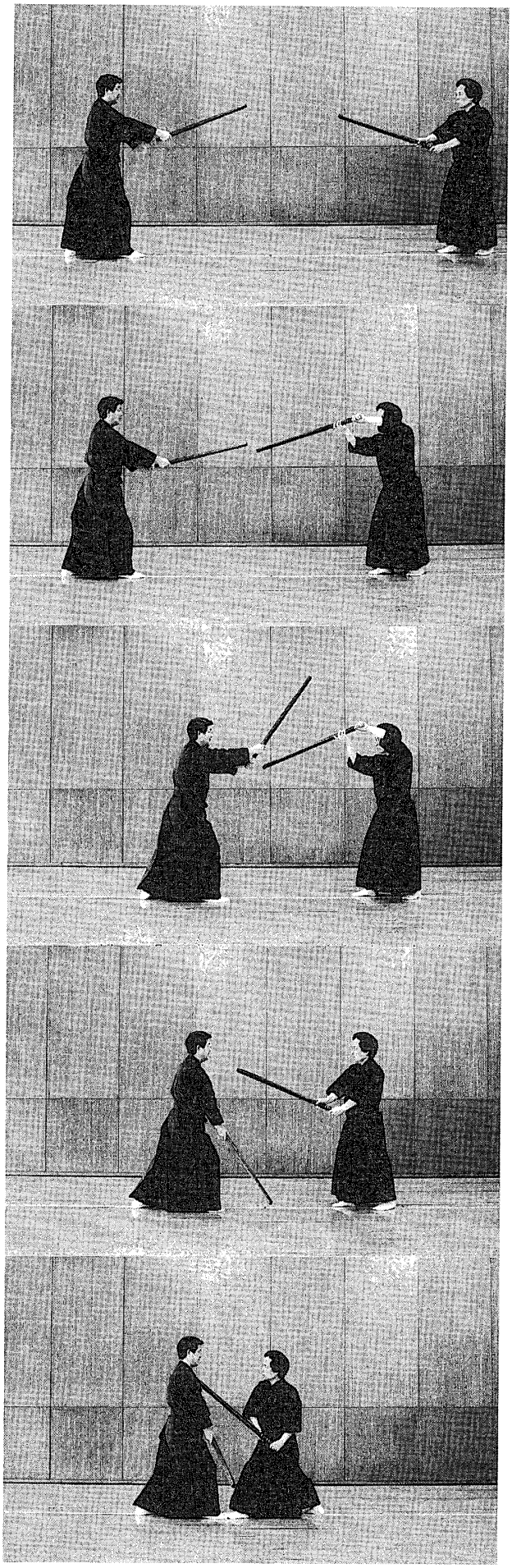
打太刀　間に入るや（剣先と剣先がまさに交差しようとする瞬間）右足を踏み込んで使太刀の太刀越しに、使太刀の拳を斬ってくる。

使太刀　応じて右足を踏み込んで、摺(す)り下ろすようにして打太刀の太刀を真っ向に斬り下ろし、ノッて勝つ。（剣先は敵の目に付ける）剣先を打太刀の前面（喉の下方）につけて、直ぐに左足を打太刀の前に出た足先に乗って踏み押さえる。

◉古式の型「捷径」と同様、打太刀の右足を左足で踏み押さえ、後ろの右足を踏み込んで倒し、突き刺す。

佐野嘉内『新秘抄』

この形を獅子の洞出(ほらで)と云い、洞穴より猛獣のたけっ（猛）て出るに喩(たと)え、この太刀さき三寸へつけて、弓手（左手）の肘を捧げ、相手の太刀さきを押ゆる。相手、拳を払うとき、太刀を摺(すり)こんで両腕を押さえ詰て勝つなり。この有様を獅子の洞入と云い、鋒をもって敵の胸板をつらぬくことを小詰と云うべき。



大詰（オオヅメ）

使太刀　少し離れて間合いをとり、右片手にて太刀を立てて（拳を盾にして）上段に構える。①

打太刀　順の中段に構える。

使太刀　ササッと接近する。（迎え）

打太刀　堪らず、その使太刀の太刀越に使太刀の拳を斬ってくる。

使太刀　その瞬間、左へ開くと同時に太刀を上げて外し、直ぐ右足を踏み込んで打太刀の面を右片手にて斬る。

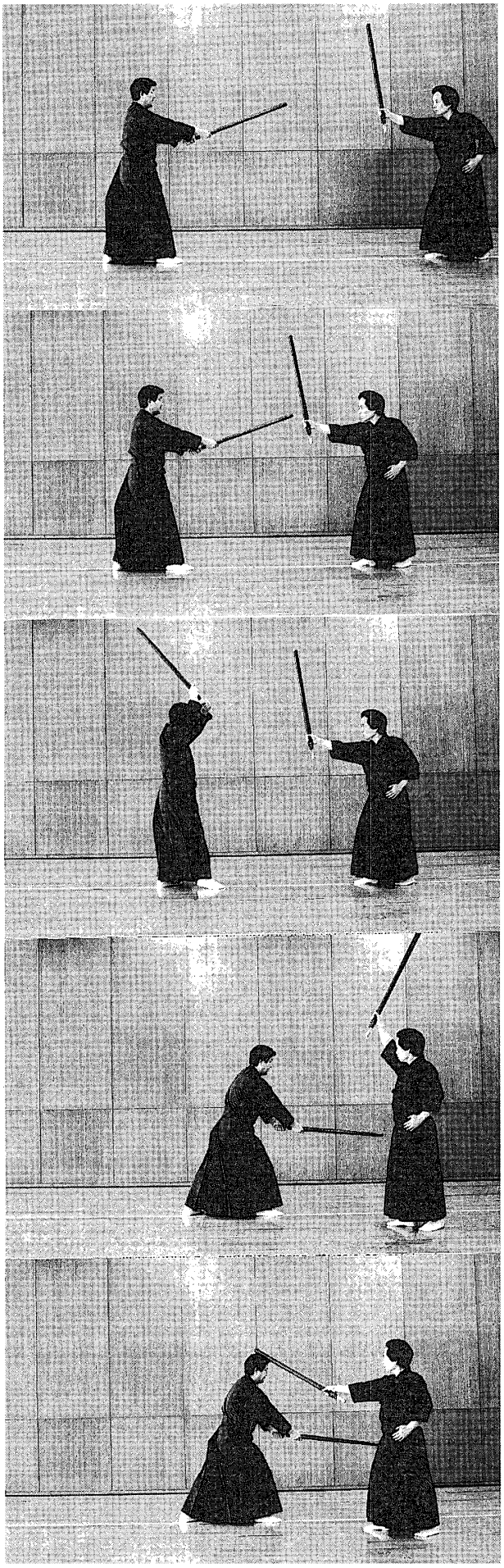
使太刀、打太刀とも太刀を下段に構えて離れ、使太刀は横雷刀に構える。

（次の「八重垣」と続けて使う）

【考察①】他伝では、中段に太刀を構えた打太刀が拳を打ってきたのを、太刀を両手で「上段真直ぐ向上（両拳、乳通り）」に構えた使太刀が大きく、雷刀に取り上げ抜いて面を打つだけである。

佐野嘉内『新秘抄』

大詰は、大きになじると云う事なり。相手、清眼にかまゆるとき、上段の太刀、拳を楯にして、敵の顔へ突きかけて懸かるとき、拳へ打ち込む身形を直ぐに跡（後）へ外して、上より二星を勝つなり。・・・習いに大調子の小調子、小調子の大調子と云う事あり。大調子と云うは無拍子の事なり。小調子とは、太刀に拍子をもたせて打つことなり。敵、小調子に斬らば、大調子に勝ち、大調子に斬らば小調子にて勝つべし。皆以て相気を欠くことなり。敵の小調子を大調子を以て勝つことを、大詰と云うべき。



八重垣（ヤエガキ）

（「大詰」に続けて使う）

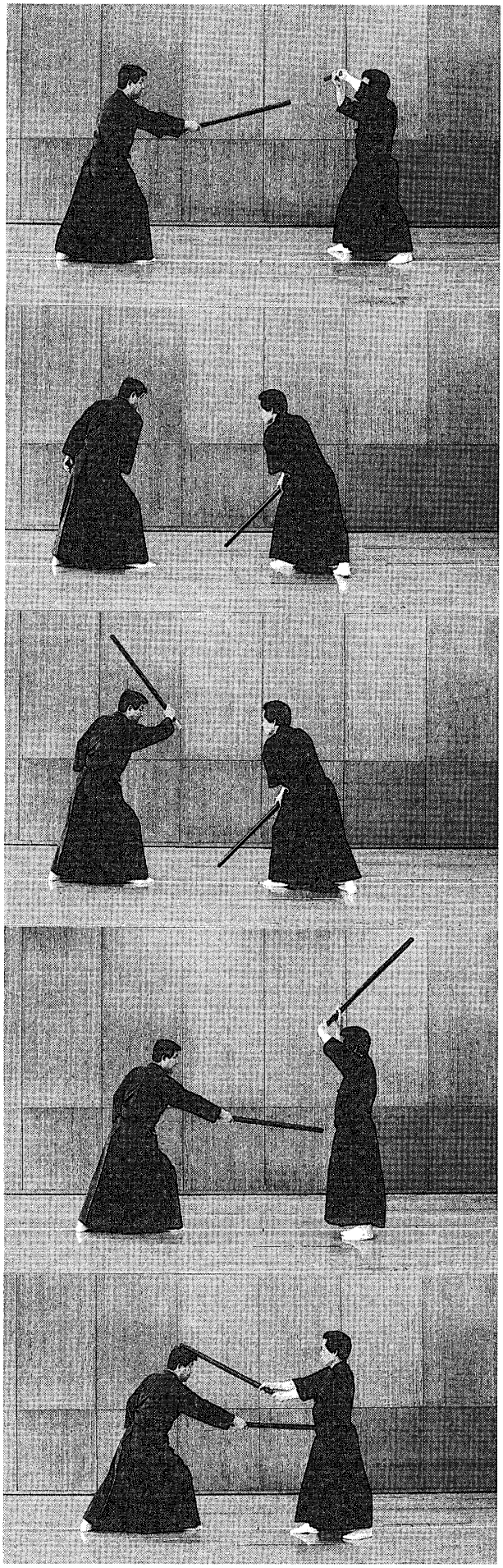
使太刀　八重垣〝霞の太刀〟に構える。①

打太刀　順の中段で太刀を右膝と一直線に、剣先を使太刀の左肘に付けて構える。

使太刀　打太刀の出ている左拳に対し、右足を右に開くや直ぐ左足を踏み込んで斬っていく。（口伝②）（迎え）

打太刀　その瞬間、後ろの左足から引くと同時に太刀を引いて使太刀の打ちを外すや太刀を左後ろから廻して、使太刀の体勢が緩んだところを右足を踏み込んで右片手にて裏（背中側）を斬ってくる。③

使太刀　それを、すばやく上体を起こすと同時に前の左足を左へ開き抜いて外し（両足を揃える）、右足を踏み込んで真っ向を斬る。



【考察①】五ケの習い「我が拳を盾につくべき事」

【考察②】同時に右足を左足の左後方に引く。

【考察③】「輪の太刀」または「魔の太刀」という。

佐野嘉内『新秘抄』

八重垣は、太刀を八重に使うことを云う。相手、清眼の上段に構えて居るものに、右手の足をふみ出し、太刀を頭の上に、切先をうしろへなして霞でかかる。霞と云うは、太刀先をささえて拳を巻くことなり。相手詰懸かるとき、足を跡へふみかえて、太刀半分へ巻きかくるなり。敵、太刀をまきて拳へ打込むを、弓手の方へ足を入れ替えて、腕を搦んで勝つなり。太刀を矢違いに使うて、身の郭にして、弓手右手へ入違へて斬れば、少も中る事なし。この心持を八重垣と云うべき。

村雲（ムラクモ）

使太刀　十二分にとった間合いにて順勢の下段に構える。

打太刀　順の中段で、太刀を右膝と一直線に構える。

使太刀　下段から中段に変りながら次第に剣先を上げて接近し①、間に入る手前でサッと剣先を落とし、右足前の前屈姿勢になる。

打太刀　それに応じて剣先を落とし、右足前の前屈姿勢になる。

使太刀　右方へスーッと移動しながら接近し（右足前は変らず左右左右と交互に移動させながら打太刀の前面に接近する）。

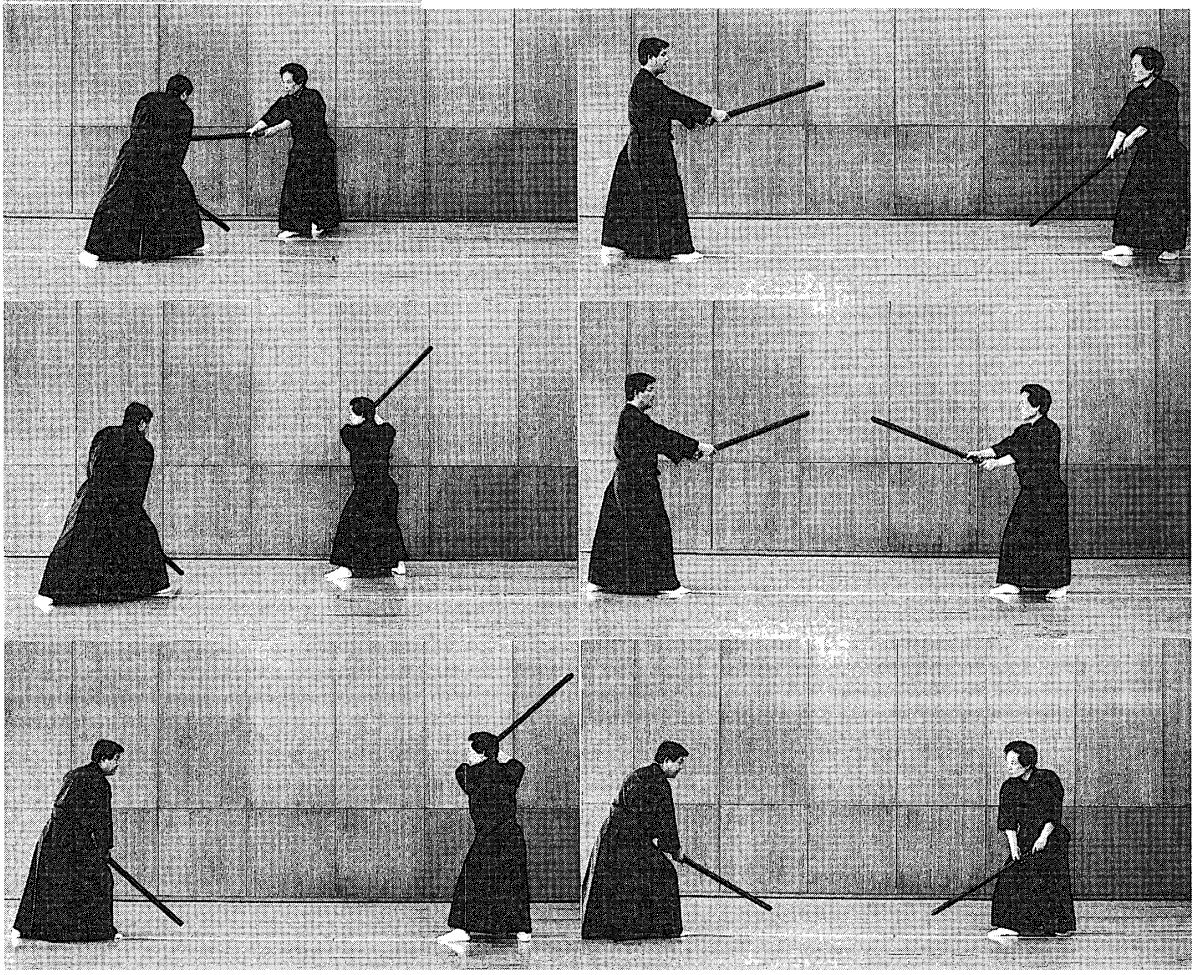
間に入るや「行くぞ！」と太刀を右にかつぐ。**（迎え）**

打太刀　その瞬間、右足を踏み込んで、使太刀の右腕を斬ってくる。②

使太刀　それに応じ右足を踏み込んで打太刀の右腕にノッて勝つ。

打太刀の右小手を抑えて、剣先を打太刀の柄越しに前面（腹）につけて押して離れ、すぐにスーッと後足から後ろへ引いて元の位置（剣先を落とした位置）へ戻りながら大きく開いて八相に構える。

打太刀　引いて、右足前の前屈姿勢の体勢のままにて向きをかえながら、使太刀の方に向く。



【考察①】柳生の秘太刀である。他伝では両方とも文（あや）をきる。

【考察②】**他伝**では太刀を担がないうちに打太刀の方から打っていく。

四

以上が「大坪指方直伝・柳生勢法懸待の位」の「三学円の太刀」と「九箇の太刀」の刀法の考察である。柳生宗矩の『兵法家伝書』の冒頭の巻「進履橋」によれば、刀法にはそれ以外に「天狗抄　太刀数八」と「その外太刀数六」等がある。しかし基本はあくまで「待の位」である「三学円の太刀」五本と「懸の位」である「九箇の太刀」九本であり、「天狗抄」以下はその応用である。

第二部では「刀法」としては「天狗抄」等も取り上げるが、あらかじめ確認しておきたいことは、何にでも言えることであるが、応用をいくら修練しても、基本が身についていなければ実力とはならないということである。しかし基本がしっかりと身につけば、応用技を学ばなくても、それはその人の実力となるものである。まして刀を使っての実戦というものがない現代、伝統武道に対する興味は別として、新陰流の稽古を現代生活に活かすためには「三学円の太刀」と「九箇の太刀」をしっかりと身につけることが肝要である。「無刀取り」もそこから導き出される。

『兵法家伝書』は「進履橋」「殺人刀」「活人剣」「無刀の巻」と四巻に分けることが出来る。勢法を分類した「進履橋」に対して、「殺人刀」は主に斬り合いに必要な「懸待表裏」を論じている。

次の「活人剣」では、新陰流の極意である「是極一刀」を「是極とは、これ至極なりという儀なり。一刀とは、刀にあらず。敵の機を見るを、一刀と秘するなり。大事の一刀とは、敵のはたらきを見るが、無上極意の一刀なり」とあるように、「敵の機を見る」ことが何よりも重要であるとして、「手の内」「間合い」「太刀の納まる所」「病気(心のこだわり)」「手足の働き」の見方を「五観一見」として論じている。(これについては次号で検討する)

しかし宗矩が続けて「敵の機を見るを一刀と心得、はたらきに随いて打つ太刀をば、第二刀と心得べし」と言っているように、敵の機を見て敵の「はたらきに随って」敵に対して刀を打つことが出来るためには、敵の打ち出す太刀を確実に避ける体捌きを身に付けていることが絶対条件である。したがって新陰流における稽古の中心は体捌きを身に付けることであると私は考えている。そして「無刀取り」も体捌きによって可能になるのである。その意味で、「新陰流は対捌きである」と看破して、「対捌き」の修練を教習の中核に置いた大坪指方師範の「柳生直伝懸待の位」は新陰流の本筋であると私は考えている。

『兵法家伝書』の最後は「無刀の巻」である。

「無刀」ということは単に刀を用いないということではなく、修練を積んだ結果、融通無碍(ゆうずうむげ)(大機大用(だいきだいゆう))に心身を働かせるということであるが、それは到達した普遍的な境地として存在するのではなく、生涯の修練を通して追及していくべきものである。「無刀」に到る「刀法」「心法」と、それを現代の生活にいかに活かすかということについては第二部で検討したい。

私は現在、大坪伝の柳生新陰流を後世へ受け継ぐべく、新陰流稽古会「沈龍の会」を主宰し、さらに新陰流を、単なる武道を超えて心身を育成する運動――「新陰流体操」といった運動体に発展させる道を模索している。

第一部　終り

(神奈川歯科大学教授)